
薔薇色の姫君

林田くう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇色の姫君

【Nコード】

N0002W

【作者名】

林田くう

【あらすじ】

血のような紅い髪、全てを？み込むような青黒い瞳・・・

2つの王族の血をひく少女は、人々にこう呼ばれていた

「影の姫君」と。

これは、自らの運命に翻弄されつつも、強く生きようとする少女の物語

「どれだけ大切なものでもいつしか失ってしまうのに、今を大切に
して、何か変わるのか？」

夢の始まり

今から18年前、国中を揺るがすある事件が起きました。

国民から愛されていた「ロアリス王国」の王妃様が他の男と子供ができたのです。

嫉妬深いことで有名だった王様は「自分のものにならぬなら」と、王妃様を死刑にして、隣の国の「タゼーバス王国」と戦争を始めました。なんと、男はタゼーバス王国の王子だったのです。

そうしていつの間にか2つの王族の血をひく子供は姿を消しました。今、その子供が生きているか死んでいるか、知っている人はいません。

そして今、ロアリス王国は貴族と市民の差別が激しい状況にあります。

そんな中、少女が町を駆けずり回っていました。

彼女の名は「ローゼアス・バリスタ」幼い頃に親を亡くし、さまよっていたところをこの町の人々に助けられた女の子。心優しく、みんなに慕われており、「ロゼッタ」と呼ばれています。

これはそんな少女の宿命の中に身を投じていく、物語・・・

悲しくても、辛くても、

「イバラの道の血の海を、一緒に歩いてくれる人がいるかぎり、あたしはどこまでも生きていける」

夢の始まり（後書き）

はじめまして。林田空です。「そら」じゃなくて、「くう」です。私は物語を書いて早8年、初めての投稿作品になります。この物語は今年の春にノートにて、書き終わったのですが、「いつかかきなおしたいなあ。」と言う思いがあり、このたび、投稿するにあたって、この物語にしました。どうか、ロゼッタちゃんをよろしく願います。よければ、私も応援して下さい。

姫様専属護衛兵士のお願

「ロアリス王国貴族街、市民街を分ける門の近くにて」

「きゃー！ーっ！」

「わぁーっ！鬼が来たっつ、ロゼッタお姉ちゃんが鬼だよっ」

子供たちと鬼ごっこをしながら、走り回る18歳の少女。肩までの紅い髪、右耳だけに鳥の羽のアンテ

イクがついたピアスをしているこの少女こそが、ローゼアス・バリスタ。通称ロゼッタと呼ばれる少女だ。

「まぁーてえー！ー！」

ロゼッタは、男の子に狙いを定めることにした。もちろん、子供相手に本気で走るなんて、おとな気ないことはしないが、いつまでも自分が鬼をやっているはおもしろくないだろうと、思ったのだ。

自分が狙われていることに気づいたのか、男の子は無我夢中に走り出した。

「あっ！そっちはダメっ」

ロゼッタがそう叫び、手を伸ばしたのと、門から出てきた貴族がぶつかると、同時だった。

どんと、音が鳴り、笑いながら逃げていた他の子供たちもなんだろうと、足を止めた。

「いたっ！」

悲鳴をあげて、男の子は尻餅をついた。

「な、なんじゃ、そのガキはっ!？」

高齢のおじいちゃん貴族だった。眉間に皺を寄せ、厳しい顔をしている。ロゼッタは、やばい！と、思い急いで、男の子の傍に走った。
「いたたたた・・・」

男の子は、そういいながら顔を上げるが、目の前に立つ貴族の顔を

見たとたん、表情を強張らせた。

驚きと恐ろしさが交わり、声も出ない様子だった。

「ごめんなさいっ！この子には、よく言っておきますんで、どうか命だけは・・・」

貴族に深々と、頭を下げた。本当はこんなことをしたくはないが、このままでは男の子の命が危うい。

「ふんっ、このような無礼者には体罰が必要じゃろう。」

貴族が、護衛につけていた兵士2人に目で合図した。兵士たちは躊躇なく、男の子に刃を向けた。

仕方がない、もうここは・・・！そう、思い、ズボンの中から拳銃を出そうとした時

「ちよつと、待ってやってくれないか。」

男の声に、貴族は振り返り、兵士は動きを止める。

「あ、あんた、いや、あなた様は・・・！」

壁にもたれ、腕を組み、ニヒルな笑顔を覗かせる男に、貴族は驚いたように、眼を見開き、兵士は敬礼のポーズをした。

「ツアリ姫様専属護衛兵士、ゼウス殿！？一体何故ここに・・・」

「俺が散歩しては悪かったでしたか？ユーベル様」

「めっ、滅相もない！！」

貴族は手をぶんぶんと横に振った。すると、ゼウスという男とロゼッタの眼が一瞬合った。だが、すぐにゼウスは貴族へ視線を戻す。

「ユーベルさん、ここは俺の顔に免じて、そのガキを見逃してはくれませんか？」

貴族のユーベルはニヘラヘラと笑い、「もちろんです」と、うなづいた。

さつきまで偉そうに仁王立ちをしていたユーベルは気持ち悪い笑顔を作り、手をさすっている。

そして、そそくさとその場を逃げるように去っていった。姿が完全に見えなくなつてから、ゼウスが男の子の傍に寄ってきた。

「ほら、坊主、立てるか？」

「うんっ、お兄ちゃんありがとう」

男の子がそう言って立ち上がると、子供たちもゼウスのまわりに群がった。

「お兄ちゃん、ありがとうね」

「お兄ちゃん、偉い人なんだね！」

子供たちが続いて、ロゼッタもおずおずと、ゼウスの傍に行く。まあ、子供たちのようにそこまでして近づきはしなかったが。

「あの、助けてくれてありがとう。」

ゼウスは、ロゼッタの顔をまじまじと見つめて、何か思いついたように小さくうなづいた。

「礼はいい。それよりも、お願いしたいことがあるんだが・・・」

そう言つて、自分に群がる子供たちに、しせんを移した。どうやら子供には、言にくい話らしい。

姫様の専属護衛兵士らしいから、子供に話せないということとはかなり物騒な話なんだろう。

ロゼッタは、うなづいて子供たちに遠くで遊んでるように、言った。

姫様専属護衛兵士のお願い（後書き）

いよいよ、物語開始です。長くなるかも知れませんが、よろしくおねがいします。そして、この物語を読んでくださり、ありがとうございます！

次の話も読んでくれると、幸いです。では、次の話で会いましょう！

お願い事の内容

「で、何だ？話と言うのは。ナンパなら他をあたれ。」

ロゼッタは、皮肉めいた口調ではぐらかしたが、ゼウスは険しい顔をほぐそうとせず、話を始めた。

「あんたに折り入って、お願いがあるんだ」

「その仏頂面からして、明るい話じゃなさそうだな。」

ゼウスはうなづいて、話を続ける。

「この国の姫・・・ツアリ姫のことなんだ。」

ツアリ姫・・・ロアリス王国の姫君で、18年前のあの事件の時の王様が、新しい王妃を娶り、生まれたお姫様だ。数年前、不治の病とされていた「カナリア病」を治す薬草を発見し、日の入りと共に、国に戻って来たため、「光の姫君」と呼ばれている。

「で。そのツアリ姫がどうかしたのか？」

「とある奴に、命を狙われてる。そこで頼みがあるんだ」

「はあ！？何、あたしが代わりに死ねって、言いたいのか！？」

「そうではない。」

ロゼッタを悪く言うこともなければ、呆れることもせず、首を左右に振って、話を続ける。ここで、

「馬鹿か。」「だから、女は嫌なんだ」など、言えば、その顔面にパンチを喰らわせていた。と、ロゼッタは、思った。

「ツアリ姫と共に、国を出て欲しい。」

「・・・」

また、わけの分らないお願いだな。なんて余裕をかましてられなかった。突然の言葉に、すっかり、動揺してしまって、声が出なかった。

「突然ですまないが、頼む。少しの間、避難してくれればいい。」

「・・・。また、ここに帰って来れるかな？」

ゼウスは「ああ。」と、言い、表情が和らいだ。ほんの少し、微笑

んでいるようにも見える。良く見れば、なかなか顔立ちの良い青年だった。

「分かった。この件は受けてやる。さっき助けてもらった恩があるしな。」

「すまない。感謝する。お前の名前は？」

「ロゼッタ。ローゼアス・バリスタ」

「ロゼッタ・・・オレは、ゼウス。良く覚えておくんだな。」

その瞬間、ゼウスの手が首に向けて振りあがり、首の痛みを感じると共にロゼッタの意識は遠のいていった・・・

「おい。起きろ」

誰かに呼ばれ、ロゼッタは眼を覚ました。

「っ！！」

眼を覚ますと共に首がじんじんと痛んだ。

「そつだ！あの野郎っ・・・」

首筋を押さえ、顔を上げると、そこは牢屋の中で、鉄格子の向こうには・・・

「なんだ、俺の顔を忘れたのか。良く覚えてると、言っただが」

「名前は言っただけど、顔については、言っていないわよ！ゼ・ウ・ス！！！」

鉄格子に掴まり、ゼウスを睨みつける。すると、ゼウスは対して悪びれる様子もなく

「ああ。悪かったな。城内に入るには、これしか方法が無かったんだ」

そう言つて、扉の鍵を開けた。外に出ると、見張りの兵士はおらず、いるのはゼウスとロゼッタだけだった。

「もう、夜なのか？」

「すっかりな。」

誰もいないと分かっているのに、辺りを見渡してみる。無論、2人

以外誰もいないが。

「ほらっ。これ、返しておく」

ゼウスが投げたのは、ロゼッタの拳銃だった。驚いて、ズボンの内側に隠している拳銃があるか確かめてみる。・・・が、なかった。つまり・・・

「お、お前！まさか・・・」

「牢屋に入れるにも、それ相当の理由がいるからな、「拳銃を乱用しようとした・・・」なんて言うておかないと・・・な」

イタズラな笑みを浮かべ、ゼウスはロゼッタを見た。あんにやる・・・と、殴りたくて、仕方が無かったが、ここで変に暴れれば、誰か来るかもしれない・・・そう、思い拳をひっこめた。それを知ってか、ゼウスは

「では、行くぞ」

早々と、歩き始めた。ロゼッタは、まだ痛む首筋を支えつつ、彼の後ろを着いていった。

お願い事の内容（後書き）

ゼウス君、もっと優しくなってくれ・・・！

へくうは、血液検査のため、血を抜かれ、右手を伸ばすのが大変です

次は、ちょっと甘くなる・・・か！？

光の姫君

城の中は薄暗く、ろうそくの光と月明かりを頼りに、2人はツアリ姫の部屋へと向かった。

長い廊下が続く。

「ん・・・」

首の痛みはなかなかとれず、違和感に耐えかね、首を左右に振っていると、ゼウスが振り返った。

「すまない。手加減したつもりなのだが・・・」

そつと、ロゼッタの首筋にゼウスの手が触れた。体が跳ね上がり、勢いのまま、ゼウスを突き飛ばした

「な、なな、何すんのよ！！変態！！！」

顔を真っ赤にして、騒ぐロゼッタに、ゼウスはクスツと笑い、ロゼッタを見下ろした。

「男に触れたことが無いのか」

ゼウスは「初々しいな」と、馬鹿にするような余裕の笑みを見せた。こいつ、いっぺんぐらなきや気が済まん！！ロゼッタが拳を振り上げようとした時

「いたぞ！！」

数人の兵士がやって来て、ロゼッタと、ゼウスを指差した。

「ちっ！気づかれたか・・・ロゼッタ、戦えるな？！」

銀の槍を構え、ロゼッタに視線を送った。

「当たり前だ！」

拳銃を取り出し、兵士にむけた。相手は5人、少し危ういがなんだかいけそうだった。なぜなら、兵士は新米なのか、ロゼッタの銃口を向けられただけで、腰を抜かしており、あとの4人はゼウスの存在に気づいたのか、剣を握ったまま、ビクとも動かない。

「まだまだだな」

ゼウスは、3人をなぎ払い、壁に打ちさせた。兵士はぐったりして

いる。一方、ロゼッタは拳銃を使わず、2人の背後に回り、首に手套を浴びせた。

「ぐふっ……」

兵士が2人、倒れた。ロゼッタは手をパンパンとはたき、倒れている兵士達を見下ろした。

「こいつらがツアリ姫を狙ってる奴ら？」

ゼウスは笑みを零し、ロゼッタと同じように、兵士達を見下ろした。

「こんなに弱かったら、協力を求めないさ」と、苦い顔をした。

「失礼します」

ノックをして、ツアリ姫の部屋に入る。そして、1番に目に飛び込んできたのは、ツアリ姫ではなく、灰色の髪をした、青年だった。

こっちの青年は完全なる美青年で、こちらを凝視している。ロゼッタと同じ、青黒い瞳をつかさどり、目は鋭く切れ上がっていた。

「……成功したんだな」

「ああ。準備はできたか？」

「言われるまでもない」

青年は立ち上がり、部屋の奥のほうを見つめる。なんだろうと、ロゼッタも視線の先を見つめた。奥から現れたのは、ツアリ姫だった。

「え、えと……」

貴族の買っ服の中で、1番動きやすい服を着ているが、ロゼッタの目からは、動くにくそうにしか見えなかった。

「あ、の……」

ツアリ姫とロゼッタの視線が合い、ツアリ姫が首をかしげ、話しかけてきた。

「初めまして。ツアリンナ・モンテ・フィッシャル・ロアリスです。」

顔を赤らめ、恥ずかしそうに自己紹介する、この少女こそが、「光

の姫君「ツアリ姫だった。

光の姫君（後書き）

少しは甘くかけたでしょうか・・・

私は物語を書いていると、恋愛が後まわしになっちゃうんですよね・・・

・

☆これが、なかなか直らない☆

可愛い子には旅をさせる

「ツアリ姫・・・？あなたが、あの・・・」

光の姫君・・・と、言おうとした時、ツアリ姫が首をぶんぶんと左右に振った。あれ？どうということ？

何を間違えたのだろうか。と、ツアリ姫を見て思った。

「姫なんて、恥ずかしいです・・・」

紅く染まるほほを手で隠し、うつむきながら、そう言った。どうやら、恥ずかしがり屋のようだ。

ベビーピンクの髪色をハーフアップにして、純白のワンピースを着ている。姫は足を隠すドレスを着るので、足に見えるこの服装は恥ずかしくてたまらないのであろう。

「じゃあ・・・ツアリ、ちゃん？」

自分より年下だし、呼び捨てにするのもなんなので、そう呼んでみた。ツアリ姫は、嬉しそうに笑い、「はいっ！」と、明るく返事をした。その時、

ばきんっつっ！！！！

大きな音をたて、ツアリ姫の扉が外された。

「・・・鍵をかけていなかったのか？」

青年がゼウスを睨みつける。かなり、機嫌が悪そうだ。扉を外し入ってきたのは、城の兵士達だった。

しかも大人数だ。ゼウスは槍の矛先を兵士達に向け、じりじりと間合いを詰めた。

「行くぞ」

青年はツアリ姫を抱きかかえ、窓から飛び降りた。

「えっ！」

ツアリ姫は有無を言う暇なく、驚きの声だけを残していった。あとは、ロゼッタとゼウスだ。

「あんたも、はやく！！」

窓に足をかけ、ゼウスに声をかけた。いくら姫専用護衛兵士といえど、この数を相手にするにはかなりの無理があった。だがゼウスは「いけっ！俺がしんがりにつく！！お前はにげろっつ！」

そう言つて、襲い掛かってきた兵士をなぎ倒す。

「・・・わかった」

あいまいなうなづきを返した時にはゼウスはロゼッタには目もくれず、槍を振るつていた。

窓から飛び降り、隣の木へ移った。下のほうにツアリたちがいる。

ロゼッタは振り返ることなく、まっすぐツアリたちについていった。

「・・・いったか」

そんな小さなつぶやきは、誰にも届かなかった。

「はあはあ・・・」

城からどうにか抜け出し、市民街についた。ロゼッタもぜいぜいと息を切らしているのにたいし、青年は汗は流しているが、息は驚くほど落ち着いていた。

汗をぬぐい、青年のほうに視線を変えた。

「そういえば・・・あなた誰？」

「デュークだ。あいつと同じ、ツアリ姫専用護衛兵士・・・」

「あたしはローゼアス・バリスタ。ロゼッタって呼んで。」

「へえ！！ロゼッタって、いうんですね！！」

2人の会話にツアリも入ってきた。そういえば、ツアリ姫・・・じやない、ちゃんに教えてなかったけ？

ロゼッタはよろしく。と、笑って見せた。

「それより、これから移動するぞ」

どうやら、追つてはゼウスのおかげか、1人もいなかった。なら、今のうちに、移動したほうがいい。

歩き出す、デュークにまだ息を切らしていたツアリも必死で着いていった。・・・なんだか、全然姫を気づかっていないような気がし

た。ロゼッタも2人に続いていこうとした時、

「ロゼッタ？」

声をかけられ、振り返ると、ずっと世話をしてもらっていた育ての親のおばさんが立っていた。

「あつ、の・・・」

ロゼッタが立ち止まっているのに気づき、2人も足を止めた。

「あ・・・たし・・・」

何か言わなきゃ・・・そんな思いで、しどろもどろするが、肝心な言葉が出てこなかった。

「行つてきなよ」

おばさんは暖かな眼差しをしていた。そして、ロゼッタにお金を手渡した。

「何があつたか分からないけど、本当に行くなら、持っていきなさい」

大丈夫。少ししたら帰つてくれるから・・・なぜか、この言葉が声にできなかった。悪い予感が、胸を締め付ける。ロゼッタはうなづいて、お金をウエストポーチに入れる。

「行つてきます」

やっといえたのが、この言葉だった。

「可愛い子には旅をさせろ、なんてね！」

おばさんは、がはは！と、笑い飛ばした。

可愛い子には旅をさせる（後書き）

「しんがり」と、いうのは「追ってを食い止める人」みたいな感じ
です。

さあ、旅が始まりますよ！にしても、やっぱり親しい人と少しの間
と言えど、離れるのは寂しいですね。「ちよつと、ツアリちゃん
を助けてくる！！」なんて、いえないですしね・・・

産業都市カルミナ

ロゼッタたちはロアリス王国の首都を出て、まずは産業都市、「カルミナ」へと、向かった。

「ここが産業都市、カルミナか・・・」

町に入ったとたん、たくさんの人でにぎわう市場があった。たくさんの店が並び、市場は活気に満ちている。

「さすが産業都市と言われるだけあって、すごいですね・・・」

物珍しそうに辺りを見渡す、ツアリ姫。やはり、お姫様となると、そうやすやすと城から出ることが出来ないのかもしれない。城の中とはいえ、ずっと部屋に閉じこもっているなど、あたしにはできないだろうな。と、ロゼッタはツアリを優しい目で見守った。

「宿を探すぞ」

市場の活気など、目もくれず、デュークはせかせかと歩き出した。

ロアリス王国の首都からカルミナにはかなりの距離があり、2日ほどかかる。ロゼッタたちはずっと野宿、食べ物も簡単なパンだけだったので、足はくたくた、お腹はすき過ぎて空腹感を感じなかった。

「市場はまた、明日にしよう。ツアリちゃん」

名残惜しそうに市場を通り過ぎるツアリ姫にロゼッタはそう言うのと、ツアリ姫は「はい！」と、笑うのであった。なんだか、妹ができたみたいだ。

「産業都市カルミナの宿」

「はふう・・・」

ベッドに座り、ツアリ姫は一息ついた。ずっと、城にいた性が、足が筋肉痛になっている。同じように隣のベッドで座り込んだロゼッ

夕に、話しかけてみる。

「ロゼッタさんは、しんどくないですか？」

「ちよとだけ・・・」

苦笑いを見せてから、ベッドから立ち上がり「水浴びてくる」と、言い部屋を出た。

デュークは外に行ってしまったし、ロゼッタはお風呂へ行ってしまった。ツアリ姫は「もう少ししてからお風呂へいこう」と、思いベツドに横になった。

自由・・・今は豪華なベツドもご飯もないけど、自分で決めれる幸せに浸っていた。寝る時間もお風呂も服だって・・・自由って、いいな・・・。ツアリはにやける自分の顔を隠した。

「ツアリちゃん、お風呂入らないの？」

お風呂を出てきたロゼッタが部屋に入ると、ツアリ姫はグースカと眠っていた。

扉をきちんと閉め、窓を開けた。ひんやりとした風が部屋の中に流れてくる。空はすでに茜色に染まっていた。そうして風に当たっていると、あることを思い出した。

「あいつ、大丈夫かな・・・」

しんがりにつき、ロゼッタたちを守ったゼウスは今、どうしているか・・・何かと気になって仕方がない。ちゃんと、無事に逃げ切られただろうか。まあ、あいつのことだから、殺されてもしないだろう。と、そう自分に言いつけた。

ーその頃、ゼウスー

「だから。何度言えば分かるんだ」

イライラした口調で話す、灰色と水色を混ぜたような髪の色をした青年・・・ゼウスは、とある男と居た。

「はいはい。「影の姫君」を見つけた。そしてその子を使い、今度

の戦争を止めるつもりなんだろう」

紫の髪に赤色のメッシュが入っている男が、ゼウスと話をしている。

「私は、それで何故、「光の姫君」が必要なんだと聞いている」

「だから!!!」

「ああ!!!もう、いい!いいからっ!」

「・・・ルーマン」

「何か?」

「・・・影は、やはり闇へ連れ込むべきじゃなかった」

ルーマンはそんなゼウスのつぶやきに、小さくうなづいた。

産業都市カルミナ（後書き）

人影って、夜になると、見えませんよね。だから、影は光のもとでしか、生きていけないんです。なのに、世間からは、悪・闇と同じ存在にされる……。哀れですね。

貴族と男の子

「次の日」

「うわぁ・・・」

今日も昨日と変わらず市場は活気にあふれていた。見ているだけで、胸が躍る。ましてやツアリ姫は、目を輝かせて、辺りを食い入るように見渡していた。

「ロゼッタさん、あの・・・良いんですか？」

「ん？なにが？」

「だって・・・」

もごもごとしたツアリ姫に、ロゼッタは頭をひねらせた。

「ああ。自由にみていいぞ。昨日「市場はまた明日な」って、言っ
たし。」

「はいっ！」

ツアリ姫は笑顔を隠そうとしていたらしいが、表情は嬉しさのあまり、にやけてしまっている。なんだか、本当に妹ができたようだった。そして、ツアリ姫と共に歩き出した。そして、後ろからはデュークが付いて来ている。

「まずは、とにかく食べ物確保しとかないと・・・」

そういえば、ツアリちゃんを隠すって、どこに隠すんだろ・・・。
ふと、そう思ったロゼッタは、デュークに聞いてみた。

「そういえば、あたしたちどこに行くの？」

「ゼウスの奴、あんたに言わなかったのか？」

「聞いてないけど・・・？」

ロゼッタがそう答えると、デュークは小さくため息をついた。な、
なんなのよ、こいつ！そんなデュークの行動が許せなかったのか、
心の中でデュークを殴る。

「荒くれ者の町・・・イダルガ」

「あ、・・・荒くれ者・・・？」

荒くれ者の町なんかには姫様を置いて良いのか・・・内心ツッコみつつ、とりあえず、これ以上聞くと、怒られそうなので、黙っておい

た。

「じゅあ、ツアリちゃんー」

「ロゼッタさん！！あれ！！」

ツアリ姫が指す方向を見てみると、とある店の前に貴族が立っていた。見る限り、店の者と口論になっているらしい。その辺りだけ、不穏な空気に包まれていた。

「けっ！なんじゃ！！人気の店だからと思い来てみれば、この有様か！！」

「この有様ってなんだよ！！立派な品揃え！店じゃないかよ！！」
貴族と口論になっていたのはなんと、10歳くらいの男の子だった。
「どこが立派なみせなんじゃ！！わしの店のほうが、すごいわい！！」

・・・子供相手に何言ってるんだと、あきれるような口論の内容にロゼッタは脱力した。

「なんだとー！！」

「そこまでしておけ。坊主」

「うるさいなあ！！坊主ってなんだよ！！」
そこに割って入ったのがデュークだった。

「イリアス様、口論を子供相手に本気にしないほうがよろしいのかと」

「う、うむ・・・」

貴族はデュークにたしなめられ、引き下がったが、男の子のほうがカンカンだ。

「なんだとー！！！！俺はこどもなんかじゃ・・・」

今にも殴りかかりそうな剣幕だったが、そこはロゼッタが口を押さえた。貴族は帰り際、男の子にふん！と鼻を鳴らし見下して、帰っていった。

貴族が見えなくなり、ロゼッタが手を離してから男の子は

「くそーーーー！！！！！！！！！！」

と、大声で叫んだ。

「あんたら、何で邪魔するんだよー!!」

「えっ？あ、ご、ごめんな・・・」

男の子の勢いにあたふたする、ツアリ姫の前にロゼッタが立った。

「邪魔も何も、あんたそのままあいつと口論してたら、殺されたかもしれないのよー!!」

「死ぬことなんか怖くないやい!!」

「ふん・・・」

ズボンの中から、拳銃を取り出し、男の子に向けた。男の子はびっくりして、拳銃から目が離せない様子だった。そして、ロゼッタは躊躇なく、引き金を引いた。
パン！！！！

貴族と男の子（後書き）

ツアリちゃん子供に氣迫負けしてますね（笑）ツアリちゃんは小動物系ですね。それに比べ、ロゼッタちゃんは・・・と、いう方のちのち、考えがかわりますよ！まあ、それまで楽しみにしてくださいー！

帰ってきた青年

「・・・なんだ。怖いんじゃないか」

銃弾は見事に男の子のすれすれのとこに当たっていた。尻餅をつき、恐ろしいものを見るようにロゼッタを見ている。拳銃をしまい、ロゼッタはしゃがみこんだ。

「死ぬっていうのは、人間が1番恐れるものだ」

「う、うん・・・」

男の子はぎこちなくうなづいて、立ち上がった。つづいてロゼッタも立ち上がる。

「オレはタクト！助けてくれて、ありがとなー！！」

「あたしはロゼッタだ」

タクトが手を差し出し、ロゼッタと握手をした。タクトはすっかり落ち着きを取り戻し、ニコニコと笑っていた。

「タクトはここで働いているのか？」

「うん。父ちゃんと母ちゃんが残してくれた店なんだ」

「両親は？」

「死んだ。貴族に盾突いてさ」

「・・・そうか。兄弟はいないのか？」

「兄ちゃんがいるんだけど、貴族に復讐するとかいって、数年前にいなくなっただ」

ロゼッタは小さなこえで、「復讐・・・」と、つぶやいた。ツアリ姫なんかは、自分の位にひどく苦しんでいるようだった。

「あ。そうそう。助けてもらったお礼に店の物、半額にしてやるよ！！」

「そんな、わたくし達は・・・」

遠慮するツアリ姫をよそに、ロゼッタとデュークが次々と、品定めをしている。

「ええ！？」

驚いた様子のツアリ姫にロゼッタは簡単にいった。

「あのなあ・・・お返しは素直に聞くものだ。遠慮すれば、余計に気を使わせる」

これが、礼儀だ。と、りんごを手に持ちつつ、振り返って笑ってみた。

ツアリはその笑顔に苦笑いをして見せた。ああ。こういう方こそが、玉座に座るべきなのでは・・・と

「あ」

「え・・・」

「・・・」

宿に戻ると、ソファーにあの男が寝転がっていた。

「ぜ、ゼウスさん！？いつ帰って来ていらしゃったのですか!？」

「さつきですが・・・」

ツアリ姫がいることを知ると、身体を起こし、立ち上がった。

「ほう・・・いうことはそれだけか」

「??」

次の瞬間。ゼウスの頬に何かが、かすった。横を見れば、デュークの剣。そして前には、鬼・・・ではなく、デュークの怒れる形相。

「・・・最初から最後まで、きちんと説明し、理解した上での同意を求めると、言ったはずだが」

「?何のことだ」

「・・・」

「・・・あ。」

ゼウスがそう、声を漏らした瞬間、激しい戦いが始まった。

ドンガラがっしゃーん！！！！

「貴様、約束が違うではないか!!」

「いや、でも。ちゃんと同意した上で、俺たちについてきて・・・」

「だまれ!!!忌々しい!!!」

2人が言い争うなか、ロゼッタとツアリ姫はお茶を楽しんでいました。

帰ってきた青年（後書き）

今回はなんだか、後半からコメディと化していましたね。 ¥（＾－
＾）ノ

次は甘くなりますように・・・まあ。がんばれ！！未来のわたし！
！

メアリスでの悲劇

「そんなこんなで次の日」

「ゼウスさん、なんだか顔色が優れていませんね・・・」

「誰かさんに追っかけまわされたからだろう」

その誰かさんはいたって、普通だが。一晩中追い掛け回してたんだ・
・意外と執念深いなあ・・・

と、ロゼッタは思いつつ、一行は産業都市カルミナを出発していた。
次に向かうはロアリス王国で、1番貴族が密集して住んでいるとい
われる「メリアス」といわれる街だ。

メリアスは、その美しい町並みで有名だが、貴族を恐れ観光客はこ
くわずかしいない。

「メリアスは、今日の夕方頃には着くだろう」

「そんなに近いんだ。」

ロアリス王国から、産業都市カルミナまで何日もかかったというの
に、メアリスへはとても近いようだ

「ロアリス王国は、首都から離れたところに町をつくることを義務
づけているから、そういう風に感じるのだろう。ここからは次への
町に行くときには困らないはずだ。」

何気なくデュークが説明してくれた。やはり、姫専属護衛兵士と言
うからには、地理にも強いのだろうか。何気ない優しさを感じたロ
ゼッタは少しだけ、デュークを見る目を変えた。

「・・・何、これ・・・」

メアリスに着いて一行が見たのは残酷な場面だった。

この町には不似合いの、煮えたぎる釜の上につるされる男。その傍
には兵士が構えている。周辺は市民が集められ、哀れな目で男を見
つめていた。

「パパァー!!」

泣きながら、男に手を伸ばす男の子を母であろう女が抱きしめる。

「だめよ。・・・行つてはダメ・・・」

「パパァ・・・」

母親の腕の中でそれでもなお、父を連呼した。

「さあ、見せしめにこの男を処罰する!!」

声高らかに、貴族が手を上げた。

「これが貴族に逆らつた者の結末だ!!」

貴族のその言葉を合図に、兵士は男を吊り上げていた縄を切つた。

そして、男は釜に落ち・・・断末魔があたりにこだました。

「ああ!! っああああああ!! あっ、ぎゃああああああああ
ああ!!!!」

その断末魔はこの世とは思えないほどの凄まじさだった。ある者は
うつむいて耳をふさぎ、またある者は涙を流している。

「なんて、ひどい・・・」

その光景を目にしたツアリ姫は、突然走り出した。

「ツアリちゃん!？」

ツアリ姫が向かつたのは貴族のほうだった。

「これはなんですか!？即刻その人を助けなさい!!」

突然のツアリ姫の登場におどとする貴族達と兵士。市民までも
があっけらかんとしていた。

「ツアリ姫様・・・？も、もう遅いのです。今助けても、こやつめ
は・・・」

「何故、こんなことをしているのですか!？」

「こ、やつが、貴族に逆らつたからでして・・・」

「わたくしは理由をきいているのです!!!!」

「わ・・・わたくしの、飼っているものを傷つけたからです・・・」

「何を飼っているのですか!？」

「・・・」

「こたえなさいっ」

急に黙り込んだ貴族に、答えたのは市民だった。

「こいつ、狼を街に放してるんだ!!」

驚くべき事実にはツアリ姫は「なんですって!？」と、声を荒上げる。つづいてさっき男を呼んでいた男の子が話し出す。

「ぼく・・・オオカミに襲われそうになって・・・そして、パパが・・・」

その後はつつかず、涙と嗚咽が溢れた。

メアリスでの悲劇（後書き）

少しシリアスになってしまいましたね……。ツアリちゃんもカンですよ！！

本当、こういう人は何考えているかわかりません！！悪もいいところですよ！！

……ていうか、こんなことを考えた私が1番最悪な奴だあ！！！！

騎士団長レイン登場！！

「な、何を泣くのだ！小僧！！」

「リンベルさん・・・でしたわね」

「は、はっ・・・」

「法に釜茹での刑などありましたか」

貴族はぐつと黙り込んだ。そして、もう無理だと察したのか、懷から拳銃を取り出した。そして、ツアリ姫の額に銃口を突きつけた。

「ツアリ姫！！」

貴族は口元に笑みを零し、ツアリ姫を人質にした。

「ずつと、その何も知らない女が偉そうに話すのが気に食わなかったのだ！！」

さすがのツアリ姫も顔を引きつつている。ゼウスは槍を手にしたが、奇襲にはかけられないようだ。

「まちなさいっ」

そう名乗り出たのはロゼッタだった。

「ただ、殺すだけじゃ、つまらないでしょ。どう？『ツアリ姫の友達も共に死んでもらう』なんて、いうのは」

「・・・ふん。友人を先に殺し絶望に浸ってから、死ぬのもまた・・・」

ツアリ姫の優しさを裏目にとった貴族はロゼッタに手招きをする。

また、ロゼッタも一瞬の隙にツアリ姫だけでも助けようとしていた。

ロゼッタは貴族の前に立った。そしてゆっくりと、銃口がロゼッタに向けられる。いまだ！！

ロゼッタはすかさず、貴族の手からツアリ姫を離した。

「きゃっ！？」

投げ出されたツアリ姫はみごと、デュークによって、キャッチされた。だが、ロゼッタが捕まってしまったのである。

「この・・・おんなああ！！」

銃口がロゼッタの額に向けられる。まにあわないー！！身体は逃げ出せず、その場で固まってしまっていた。

「ロゼッタああー！！」

ツアリ姫の叫び声・・・そして、貴族が引き金をひいた・・・

「リンベル殿、そのまま発砲すれば、この場で切り伏せますが、よろしいでしょうか」

「！！！？？」

気づけば、貴族の後ろに青年が立っていた。物腰が爽やかな青年で、見ているだけで、清まるような・・・そして、貴族の首には刃が向けられている。

「貴様あ・・・レインー！！」

「リンベル殿、久しいですね」

レインと呼ばれた青年はにっこりと微笑む。まるで、その手に持つ大剣がなんともないかのように。

「くっ・・・」

貴族は拳銃を落とすと、周りに兵士が囲んだ。

「詳しい話は役所で聞きますので」

貴族は舌打ちをしつつ、兵士達につれられていった。一瞬、何が起こったか分からなかったロゼッタはその場でぼんやりと、立ち尽くしていた。

「大丈夫ですか？」

レインに声をかけられ、われに返ると、目の前には青年の温かな眼差しがあった。

「え？あ、はい・・・」

敬語で答えてしまったことにロゼッタは気づきもしなかった。ただ、青年に見つめられるだけで、緊張してしまうのだ。

「ああ。誰かと思えば、レイン様でしたか」

「これはこれはツアリ姫様。今日はお出かけでしたか」

「え？あ、あの・・・」

言葉に困ってしまっていると、ゼウスが話に入ってきた。

「レインも相変わらずだな」

「ゼウスか。それに、デューク・・・」

「どうやら、この3人はレインと面識があるらしい。」

「ツァリはこの人、知っているのか？」

「知ってるも何も・・・ロアリス王国の軍隊の主に護衛の方・・・
『騎士』と、呼ばれる中の1番偉い人です。」

「つまり・・・騎士団長？」

ロゼッタがレインのほうを見ると、レインと目が合った。驚いて、
思わず目をそらしてしまう。

「私の名はレイン・カーラント。そなたは？」

「ろ、ロゼッタ・・・。ローゼアス・バリスタ・・・」

「ロゼッタ・・・。では、はじめまして。ロゼッタ」

突然差し出された手に、ロゼッタは困惑しつつ手を乗せた。すると、
ロゼッタの冷たい手が握り締められた。

「ご、ごめんなさい。手、冷たいですよね・・・」

「いえ、ひんやりしてて、私にとっては気持ちいくらいです」

レインがそう言って笑うと、つられてロゼッタも恥ずかしげに微笑
んだ。

騎士団長レイン登場！！（後書き）

すみません。長くなってしまいましたね。

この回にきて、やっと……。おほん！えへ。ロゼッタちゃんにも可愛らしい部分が見えてまいりました！！俗に言う、ツンデレ……。？

とにかく、何かが起きそうなレインとロゼッタ……。2人の結末にご注目したいですね！！

ささやかな約束

―役所―

「なりほど。事情は分かった」

役所の中の一室で、ロゼッタ達は事件の内容を説明した。レインは神妙な面持ちで立ち上がると、部屋を出て行った。きっと、リンベルというあの貴族に言いつもりだろう。あいつはさっきの事件を否定していると、言っていたしな。と、ロゼッタは思った。

「レインさん、すっかり、騎士として過ごしているみたいですね」

「ああ。全くな。」

ふと、呟いたツアリ姫とゼウスに、そういえば……と、思っていたことを口にした。

「レインと3人は知り合いなのか？」

「ええ。」

ツアリ姫がうなづいた。

「レインはもともと貴族の生まれなんですけど……。その、曲がったことが嫌いと言うか……。なので、親元を離れ、1人、騎士団長と言っくらいまで、登りつめたんですよ。」

「それと、どういう関係が？」

「俺たちと、同期なのだ」

ゼウスたちとレインが同期……

「ええ！？」

「なにか、不満でもあるのか？」

デュークまでもがそんなことを言うものだから、ロゼッタは首を横に振ったあと、何も言えなかった。

まさか、あんな爽やかな青年と胡散臭いこいつらが……。！！なんて、言えるわけがなかった。

「はは。そんなこともあったな……」

「あ、レインさん！！」

「リンベルはとりあえず、牢屋に入ってもらったことになった」

ですが、リンベルの受ける罰は分からない・・・と、つけたした。

「わからない？　どうということだ？」

ロゼッタは眉根を寄せた。普通なら、厳罰が下されるはずなのだが・

「リンベルは貴族の中でも、強い権力をもつ方だ。自分の権力を使い、罪を軽くするかも知れないのです・・・」

この現実に関ゼッタは何もできなかった。レインはそんなロゼッタを見て、ほんの少し目を細めて

「今日はこの役所の部屋を使ってください」

と、いい、部屋を出て行った。

「夜・橋の上にて」

「あ・・・」

こんな夜遅くに誰もいないだろうと、思っていたのだが、予想は大きく外れ、橋の上にはレインがいた。視線が交差し、どうしていいかわからず、その場であたふたしていると、レインが声をかけた。

「そんなところにいないで、こっちに來てもいいですよ」

「あ・・・はい」

ゆっくりした足取りで、レインの隣にまで歩き、どこを見ればいいのか分からず、とにかく橋の下に流れる川を眺めた。

「・・・リンベルの件がゆるせませんか？」

突然持ち出された話に関ゼッタは黙りながらも、うなづいた。

「・・・私も、その件に関しては最善の努力を尽くすつもりです」

ロゼッタを氣遣ってくれたのか、レインは優しくそう言ってくれた。でも、その優しさでさえ哀れに感じる。

「・・・あいつは、きつと死ぬまで悪行を続ける奴です」

「だろうな。・・・では、その悪行を続けられなくさせましょう」

レインの言葉に関ゼッタは度肝を抜かれたように目をぱっちり開

け、レインを見つめている。レインはそんなロゼッタに笑って見せた。

「大丈夫です。信じてください」

「・・・・・・はい。信じます。・・・・・・信じています」

「では、これができたら、またお話ししよう。」

ささやかな約束の後は、また彼と・・・・

ささやかな約束（後書き）

良かった！！私、ちゃんと書けてる！！いやあ、わたしねえ、「友達にアドバイスをちょうだい！！」って、言ったら、「話をもっと明るく」「恋愛抜けてる」なんて、言われたけど、ちゃんとかけてるよ！！

神聖な泉からの使者

―次の日―

「レインさん、行つてしまいましたね・・・」

次の任務のため、メアリスを去ったレインを率いる騎士団を、ロゼッタたちは見送っていた。

『また、話そう』昨日の夜、ささいな約束を交わしてから、レインを見るたびに大きく心臓が跳ね上がった。レインなら、きっと・・・このときからか、はたまた、出会った時からロゼッタの中の何かが大きく変わり始めていた。

「ロゼッタさん？」

「あ・・・いや、なんでもない。それより、あたしたちも行くんですよ。シイファ村へ」

シイファ村・・・滝のそばにある村で、滝の加護をうけた神聖な村とされている。その滝というのは、昔、地上に降りた女神が旅路で疲れた身体を癒すため、自らの力で清めたという、伝説があるのだ。

「ここから、そう遠くない。ぱっぱと、行ってしまうぞ」

こうして、ロゼッタたちはシイファ村へ向かつて、歩き出した・・・。

「え???もう着いたの?」

「ここが、シイファ村だ」

ゼウスがそう言つて、村の中へ入っていくのをロゼッタとツアリ姫は慌てて追いかけた。

村の奥にあつたのが、山肌から流れる滝だった。流れはそれほど強くはなさそうだった。

「うわぁ・・・。このあたりだけ、すごく涼しいですっ」

「泉になつてゐるんだ・・・」

ロゼッタとツアリ姫はまじまじと滝を見ている間に「じゃあ、俺たちは先に宿に行ってるからな」と、

ゼウスとデュークはさっさと宿に行ってしまった。

「じゃあ、わたくし達は何かお話しませんか??」

ツアリ姫の提案でロゼッタとツアリ姫は滝の下の泉のそばに座った。
「そういえば、わたくし、ロゼッタさんについて、何も知りませんね。」

「あたしもツアリのこと、あんまり知らないかも・・・」

「えと、じゃあ、ロゼッタさんは何歳ですか?」

「え?18歳・・・だけど」

「うわあ!!!いいですね!!!大人です!!!」

「ツアリは?」

「わたくし、16なんです・・・」

恥ずかしげに笑って、髪をいじった。そういうしぐさをみていると、女の子らしいのである。勿論、ツアリ姫は可愛らしい方なのだが。

「ロゼッタさんは、ご兄弟は?」

「ん・・・いないと思う」

「あ・・・そうでした。たしか、両親が・・・」

「ん?別にいいよ。あんまり気にしてないから」

あたしは平気と、ロゼッタは笑った。そして、つかの間の穏やかな時間は刻々と、過ぎっていった・・・

「さあ、そろそろ身体も冷えてきたし、宿に戻ろうか」

「はいっ」

そうして、踵を返した時だった。

「ツアリッ」

「へ?」

ツアリ姫の背後には・・・。ロゼッタはツアリ姫をこちら側に引っ張り寄せた。そして、ツアリ姫を襲おうとしたものに目を見張った。
「なに・・・こいつは」

足をなくした人間のようだった。足がないため、手で地面に這い蹲

り、移動している。皮膚はただれ、
目がない。人間の体内の中と言う中が見えていた。そして、血が流
れている。それを目にしたツアリ姫はあまりの醜さにその場で吐き
出した。

「っ！」

ズボンの中から拳銃を手に取り、その異形の人の形をしたものにむ
かって、発砲した。

パン！！

「うあっ」

かすれかすれの、人間の声。

「なんなんだ、こいつは・・・」

「きゃあははははははっ！！！！」

甲高い、女の子の声。ふと、滝のほうをみると、山肌に女の子が立
っていた。岩につかまり、ロゼッタを見下ろしている。

「あゝあ。可愛いそー。そいつ、にんげんなのにさあゝ。」

けられと、笑っている。まるで、悪魔のように・・・

「あんた、誰！？」

「えゝ。アタシィ？アタシは、ミコだよゝ。初めまして、ローゼ
アスウー！！」

「ど、どうして、あたしの名前・・・」

「んん？どうしてって？そりゃ・・・」

ミコは、掴まっていた岩から手を離し、ロゼッタの前に落ちた。

「ぎゃふっ」

いたたたた・・・と、おでこをさすりながら、起き上がった。小
声で、「ううゝ、着地失敗・・・」と、呟いている。

「改めて・・・と。アタシンは、ミコ。影の姫君様をお迎えにあが
りました」

ミコは、ひざを着き、ロゼッタに向かって、頭を下げた。

神聖な泉からの使者（後書き）

新展開ですか、これは……ミコちゃんは、ドジっ子の設定です。

影の姫君は・・・

「っ!!」

ロゼッタは急に血の気をなくしたように青ざめた。それを見て、ミコはニヤニヤと笑う。

「おや？もしかして、隠してるんですかあ??」

目の隅でツアリ姫を見ると、彼女はまだ、しゃがみこんで吐き気と戦っていた。いくら、光の姫君といえど、ツアリ姫は王族で、こんな光景を前に耐え切れなかったのだらう。おかげで、気づいていないようだ。

「・・・あなたには関係ない」

「あるんですよえゝ。めんどくさいことに」

「・・・誰かの命令か」

「はあい!!そうです。アレス様からですっ」

眉がほんの少し動いた。アレス・・・アレス・・・あいつは・・・

タゼーバス王国の現暦の王・・・つまり・・・

ロゼッタの父にあたる人

「今さらあたしに何のようだ」

「いまさら？知りませんよう。だ・け・ど。これ、命令ですから」

ミコは笑いながら、双剣を構えた。ロゼッタも拳銃を構える。辺りにピリピリとした空気が流れた。そして、ロゼッタが引き金を引く。パン!

発砲した瞬間、ミコは上空へ跳んでいた。そうすることで、弾からよける。そして、ロゼッタの前に着地する。

「!!」

ロゼッタは、ミコが繰り出す技をよけながら、間合いをとり、自分が攻撃しやすい形を作っていく。

拳銃は離れすぎると、当てにくいし、弾も届きづらい。だからといって、近すぎると切られてしまう。

適度な距離が拳銃を使う場合、必要なのだ。

「きやははっつー！！ひっさしがりいー。ああー！！っつー！！きもちいー」

ミコはくるくると、踊るように技を繰り出してくる。そして、その表情はまるで、殺戮の悪魔のように狂い笑っていた。

「くっ……」

ロゼッタは徐々に押されていった。ミコは疲れ知らずのようで、そのスピードと攻撃力はちっとも、衰えなかった。

そして……ミコの刃先がロゼッタに向けられる。

「勝負あったかなんっ」

楽しそうに舌なめずりをした。その姿は、楽しそうというよりも、不気味にしかロゼッタは見えなかった。もう、だめか……そう、諦めて目を閉じようとした時、ゼウスとデュークが自分を呼んでいる声がした。

「2人……とも」

そう漏らして、ロゼッタは意識を失った。

影の姫君は・・・（後書き）

どうなるの！？ロゼッタちゃん！！と、いうことで、早くも13話です。

何だかんだ言って、結構、頻繁に更新してます。明日、夏休みの課題テストなのに・・・。（私の中では勉強より物語のほうが大事です。・・・私の中でね）

いざ、出発

『ロゼッタ、出て行け』

突然のことだった。お人形で遊んでいた時だった、本当にいつもど
うりに・・・

幼かったあたしは、言っている意味が良く分からなかった。ただ・
・怒っていた。

『ぱぱ・・・？』

最近、様子が変だな。と、おぼろげながらもあたしは分かっていた。
ご飯を食べる時もメイドたちがいたけど、1人だった。大きなテー
ブルに、1人だけ・・・

『ここから、出て行けと言ってるんだ』

静かながらも怒りに満ちた声。あたしは怖くて、その場から動けな
いでいた。震えうるからだ、目から流れるのは、涙。

そして、もう一度

『出ていけ！！この馬鹿娘があ！！』

走った。ひたすら走る。

お人形を抱え、1人城を出た。当時6歳にも満たなかった小さな女
の子が1人、追い出された。

普通じゃ、考えられないことだがあたしは経験してしまった。孤独
と恐怖と・・・

そして、普通の・・・単純な日々こそが幸せであると、幼いながら
も知ってしまったのだ。

あたしが影の姫君だと知ったのも、この日から何年もたっていなか
った。

「ん・・・」

目が覚めて、意識がだんだんハッキリしてくる。ロゼッタは、ベッドに寝かされていた。身体を起こして、辺りを見渡す。木造の殺風景な小さい部屋だった。

「あ、ロゼッタさん！目が覚めたんですね！！」

「ああ……。ツアリ、無事だったんだな」

「はい。あのあと、デュークさんが来てくれて……」

「ミコは？あの女……」

「???巫女？誰ですか??」

そういえば……。ツアリ姫はあの人間のようなものにあつてすぐ、ダメになっていたな。ロゼッタは、そう思い出し、「いや、なんでもない」と、言った。ここでまた何か聞かれるのもめんどろだった。「それはそうと、ここはどこだ？」

「村の宿ですよ」

ロゼッタは窓の外を見た。すっかり空は晴れ渡っている。つまり、もう次の日になっているということだ。

「もう、出発するのか」

「はい……。すみません」

「謝ることじゃないよ。さ、行こうか」

「はいっ」

「おはよう……。って、時間でもないか」

「目が覚めたんだな」

村の入り口には青年が2人……。ゼウスとデュークが待っていた。

「次は結構かかるぞ。3日だ。」

「ロゼッタがそんな顔をして、デュークを凝視した。」

「いよいよか……」

「荒くれ共の集まる町まで……」

この旅の最終地点。そして、目的まで、あと少しに近づいていた。「それじゃあ、行くか」

ロゼッタたちは歩き出した。

この先に『彼女』を連れて行くことを考えるものと、この旅の真の目的を達成できるかどうか・・・。

さまざまな思いが水面下で行われていた。

いざ、出発（後書き）

わたし、タイトルのネーミングセンスがないようです・・・。
ほとんど適当ですから（言っちゃった・・・）

信用してないくせに・・・！

13日後・・・

「やっと、着いた・・・荒くれ者の町イルダガ・・・」

森を抜け見えたのがここ・・・イルダガ。ツアリ姫を隠すための町。
「いくぞ。」

ゼウスの声で、みんな一斉に・・・と、言うわけでもないが町に足を踏み入れた。

町は男だらけで、女の子の姿が見当たらない。まあ、荒くれ者の町といわれるくらいだから、女の子なんていないだろう。

「ここだ」

デュークは、そう言って足を止めた。目の前にあるのは、古びた酒場。中は昼間から賑わっているようだ。ほんの少し怖いが大丈夫だ。失うものなんて、何も無い。

ただ、あるとしたら・・・

ゼウスたちは酒場の中へ入っていった。

「おおっ！！デュークたちが帰ってきた！！」

「おーい！！ゼウスが帰ってきたぞ！！」

中に入ったとたん、店の中が一気に騒がしくなった。ただでさえ、騒がしいのに更に騒がしくなった。

なんだろう・・・嫌な予感がする。なんか、こう・・・核心に迫るような。

「パドマ、帰ったぞ・・・て」

店のカウンターで、酒におぼれているように見える老人にデュークが声をかけた。老人は背を向けたまま、何かしゃべっている。

「ふん・・・まあまあだね。時間的には。んで、影の姫君は？？」

どくん・・・大きく心臓が跳ね上がった。怖い怖い・・・。ロゼッタは平気なフリをするが、ツアリ姫は、困惑している。

「影の姫君・・・？もしかして、いや・・・そんな・・・」

「『この子がそんなわけない。』・・・とても、いいたいのかい？
光の姫君」

老人が振り返った。60代くらいのおばあさんだった。ツアリ姫はおばあさんの言葉に小さく反応を示した。

「初めまして？影の姫君・・・あたしゃ、パドマ。ここの店主さ。
そして・・・戦争を止めるために日々働く、グループの頭だよ」

「・・・ローゼアス・バリスタ。ただの町娘です」

ロゼツタの言った言葉にパドマはけつ、と吐き捨てた。

「ただの町娘え？そんなウソ、通用すると思ってんのかい？

あんたのその、『血のような紅い髪、全てを？み込む青黒い瞳・・・』
ぴったりあんたに当てはまるじゃないか」

「それだけじゃあ、証拠にならない」

ロゼツタはまだ抵抗を続けた。このまま招待がばれば、殺されるに違いない・・・そんな気がしていたのだ。

「じゃあ・・・これでいいかい？『ローゼアス・バリスタ』入れ替え
れば・・・『ロアリス・タゼーバス』」

いよいよ、あとにも言い逃れができなくなってしまったロゼツタは唇を噛んで、ほんの少しうつむいた。ここで、黙れば自分はそうだと、言っているようなものなのに。

「ロゼツタさん・・・？」

ツアリ姫の嘘だろうと、問う声がした。なんだか、泣けてくる。

「お前をここまで連れてくるのが俺たちの任務だったんだ」

「すまない。そういうゼアスの声。・・・あたし、だまされてたんだ。
ツアリ姫のためとか何とか言っ、あたしをここに連れてくるために・・・泣けてきて、悔しくなってきた。自分はそこまで・・・だ
まさないと着いてこないだろうという、気持ちを抱かれていたのだ。
悔しい恥ずかしい、信用されていない自分が・・・もっと、恥ずか
しくて、悔しかった。」

「ローゼアス・バリスタ。こんど近いうちにまた戦争が始まる・・・

だから、戦争が起こる前に、お前の手で、殺せ」

ずしっ・・・と、殺せという言葉が肩に乗った。殺す・・・

「あいつは横暴政治を行う悪人だ。・・・分かるな？」

それはつまり・・・

「あたしに親殺しをさせようって言ってますか・・・」

ロゼッタの声は本当に弱弱しいものだった。ああ・・・と、その場にいた者たちは思った。

なんて、小さな女の子なんだろう・・・

こんなにも押しつぶされそうなのに、必死にこらえて・・・。だが、パドマは容赦なく言葉を続けた。

「そうさ」

ロゼッタの中の何かが切れた。

「なんなのよ！！影の姫君とか、親殺しとか！！」

「ロゼッタ・・・」

ゼウスは目の前にいる少女・・・いや、小さな女の子に心が揺れた。「ひどいよ！！あたしを信用してないくせに・・・！！」

ロゼッタは店を飛び出した。そして、追いかけようとした者をパドマが一喝する。

「まちな！！」

「何でだよ！！」

「ほっとしてやりな。あのこだって、人間だ。混乱したりもする」

「パドマさんよぉ・・・やっぱり、親殺しなんて」

「あの善人さを見て、同情したかい？？甘いね、お前らは」

そして、小さく、あのこにはそれが大切な事なんだ。と、呟いた。

信用してないくせに・・・！（後書き）

たぶん、今回の題名が1番適當。

いよいよ、物語が見えてきましたね！！まあ、今回はわたしの心が痛んで仕方ない話でした。でも、心が痛むシーンはまだまだ富士山（そんなないと思うけれど）のごとくありますから！！みなさんハシカチとティッシュを持つことをお勧めします。では、また。
（書いてる私が泣くシーンたくさんあり）

告白

どれくらい走っただろうか。

ゼウスたちの元を飛び出し、森の中へ入っても今だ走り続けていた。足が悲鳴を上げて、木の枝で顔に切り傷ができて、走り続けていた。

「っ！！」

足がもつれ、ロゼッタは転倒した。

「い・・・た」

ロゼッタは立ち上がろうとしたが、走り続け疲労がたまっていたその身体は言うことを聞かなかった。

仕方がないので、その場に座って空を見上げてみた。

人間というのは辛くなると空を見上げると、風の噂で聞いたことがあった。だが、今、ロゼッタの心は空っぽだった。放心状態のまま、泣くことも笑うこともなく、時間が流れていく。気づけば、辺りは暗くなっていた。

「・・・」

これから、どうしよう。

1番最初に頭に浮かんだのが、これからのことだった。もう、いつそこで死んでしまおうか・・・

ロゼッタは考えるのをやめて、歩き出した。走り続けていたせいか、喉がカラカラなのだ。

「たしか、こっちに・・・」

川があったような。木々の間を通って、川をめざした。そして、川のそばにまでついた。

「・・・」

喉はカラカラだ、水が飲みたい。でも・・・。その時だった。

「誰かいるのか？」

この声の主は1人しか思いつかない。

「レイン・・・？レインなのか？？」

「ロゼッタ・・・？」

向こう側から、人がやってきた。もちろん、その人は・・・

「レイン！！」「ロゼッタ！！」

2人の声が重なり合う。レインはバシャバシャと、水をかき分けロゼッタの元までやってきた。

「ロゼッタか！！何日ぶりだろう」

「レイン・・・」

レインの嬉しそうな顔がチクリとロゼッタの心にトゲをさした。

「そういえば、ゼウスたちはいずこに？」

「・・・いないんだ」

「？」

うつむきながら、ロゼッタはつづけた。

「逃げ出してきたんだ。・・・あいつらのもとから」

「何故に？」

「・・・いえない」

そうきつぱりと言って、レインの横を通り過ぎる。

「ごめん。ちよつと水を飲ませてくれないか」

背を向けながらそう言ったからか、レインは返事をしなかった。ロゼッタはそんなことは気にせず、しゃがみこんで水を口に含んだ。潤んでいく喉とは反対に枯れていく心。

もし、ロゼッタが影の姫君だと知れば、絶対今までどつりに接し
てくれるはずがない。

そうなるのが怖くて、ロゼッタは言えなかった。

すると、突然背中から温かい何かがロゼッタを包んだ。
首に回される腕。すぐ横にある顔。耳をくすぐる吐息。

「どうしても、話してくれないのか」

「っ！！」

こんなやり方、ズルイ。そんなことしたら・・・

ここで初めて、ロゼッタは涙を流した。

「泣いているじゃないか・・・」

泣きたくないのに一度流れては涙と言うものはなかなかとまらない。
ここで泣けば、レインに心配させるだけなのに。

「ち・・・がつ・・・」

声を出そうにも嗚咽が漏れて、言葉が続けられない。

「・・・お願いだ。ロゼッタ、泣いている理由をきかせてほしい」

「ひつく・・・う・・・」

「・・・何故拒む」

「だってえ・・・言ったら、ぜった・・・嫌われる・・・」

「大丈夫だ。私はそなたを嫌ったりしない、何があるうとも」

耳元で優しく囁くレインに逆らえなくなつて、ロゼッタはやけくそでこう告げた。

「あたしが・・・影の姫君だつて言つても？」

思いがけない言葉に、レインは一瞬黙り込んでしまった。

告白（後書き）

やっと、レイン君の性格でのしゃべり方が分かった気がします！！
一人称が私と言う男の人というのは数えるほどしか書いていません
ので（レイン君いれて2人くらい）ずっと、分からなかったんです
よ！！

次回はいよいよ甘甘・・・ごほん！！

この物語ではじめての甘甘デス。楽しんでください。

この胸の中で

ああ・・・嫌われた。

ロゼッタはそう確信した。自分の存在で戦争が起こるほど嫌われている世間が人々が、好きでいてくれるはずがない。死にたい・・・そう、思った。

「それが何と言うのだ」

「え・・・？」

「私にとって、ロゼッタはロゼッタだ。悪いことは何もしていない。私と出会った時だって、自らの命を張って、ツアリ姫様を守ってくださっていた、心優しいお方だ」

「あたしのこと・・・嫌いにならない・・・？」

「もちろん」

振り返り、レインを見つめる

レインを見つめているロゼッタの表情には、ほんの少し微笑を浮かんでいた。

「実は・・・」

ロゼッタは何があつたのか全て話した。

ゼウスたちはツアリ姫を盾にロゼッタをイダルガまで連れて行ったこと、

何の事情も話してくれなかったこと、

そして・・・自分が親殺しの罪をかぶらなければならないこと・・・すべてを、レインに話した。

「・・・そうか、それで・・・」

「あたしも悪いんだ・・・いきなり飛び出して来ちゃったし・・・」

「帰るのか？」

レインの問いにロゼッタはうなづいた。

「あたしがしないといけないなら、するよ。あたしのせいで、戦争

は起きてるんだから」

「・・・つらくないのか」

「辛くないって言ったら嘘だけど・・・優先順位がちがうでしょ？」

「・・・泣いていいのだぞ」

「ん？」

「辛いのなら辛いと、嫌なら嫌だと。泣けばいい。何も今は我慢することはない」

優しい彼の言葉に胸が熱くなる。枯れていた心が、潤っていく。

「私の胸の中で・・・」

そういつた瞬間、レインが自分が何を言ったか、自分自身で疑問に思った。今確かに・・・

私の胸の中で・・・

あつと気づかぬうちに、両者の顔は紅く染まる。

「い、いや、こここれはだな。その、へ、変な意味はなくて、ちょっと、口からぼろつと・・・ではなくてっつ」

あたふたと理由をこじつけるレインが愛おしくて、笑わずにはいられなかった。

「え？あ、ロゼッタ？」

すると、レインの胸にロゼッタの顔があたった。レインは急に静かになって、固まってしまう。

「・・・この胸・・・今だけでも、貸してください・・・」

恥ずかしくて、顔が上げられないままロゼッタはそう言った。さっきまで、死にたいと思っていたが、もう少し生きてもいいかな。と言う気持ちになる。ただ・・・今は恥ずかしくて死にそうだった。

そ・・・と、レインの胸に身体をあずける。

レインはしばらく固まっていたが、ロゼッタを見て、宙をさまよっていた腕を動かし、ロゼッタを抱きしめた。

ロゼッタはとても小さくて、冷たかった。抱きしめる腕に力がこもる。

レインは優しくして温かかった。太陽が射して来たみたいで・・・ず

つと、私が求めていたものをレインは持っていた。そんな気がする・

幸せすぎて、涙はすっかり消えてしまっていた。だが、これからのことを考えると、心が痛む。

それが不思議な事に、その心の痛みが溶けていくのだった。きっと、レインに抱きしめられているから。

好きなんだ・・・レインのこと。

「レイン・・・ありがとう」

今はどれだけ辛いことを考えてもこのぬくもりがある限り、痛みが溶かされていく。

幸せだな。

なんだか、だんだん寝むたくなってきた、目が自然と閉じていく。

ああ、眠ってしまったら、時間が早く過ぎるから、嫌だな。と、思ったが、そう思っただけで身体はすっかり睡眠状態に入っていく。

「おやすみ・・・ロゼッタ」

眠ってしまう前に、そんな声があった。

「うん・・・」

ロゼッタはそれしか返せなくて、そのまま眠ってしまった。

そして・・・目が覚めても、そのぬくもりは消えていなかった。

この胸の中で（後書き）

あ、甘い・・・！！！！！！

この甘さは中毒並だ！！やばい！！糖分取りすぎた・・・。

なんて思っ私ですが、皆様、ご満足いただけましたでしょうか。

比較的、恋愛要素がゼロに等しい私の物語ですが、やる時はやりま
すよ！！！！

そして、第一章ももうすぐ完結です。

よろしければ、感想を下さい。では、また・・・

そして全てを背負い込んで

「た、・・・だいま？」

レインと別れ、荒くれ者の町イダルガへと戻ったロゼッタは酒場の扉をほんの少し開けて、中の様子を――

「ロゼッタあつ」

「はえ！？」

いきなりツアリ姫がロゼッタへ抱きついた反動でロゼッタは後ろに倒れてしまった。

「いたたた・・・ちょ、ツア」

「ごめんなさいつつ」

ツアリ姫の突然の謝罪に、ロゼッタは改めて現実に直面した。ツアリ姫は頭を下げ、「ごめんなさい、ごめんなさい・・・」と、繰り返し返していた。

「・・・ツアリ、もう分かったから、顔上げて？」

「・・・ロゼッタ」

ツアリ姫とロゼッタの瞳がまっすぐに相手を捉えている。光の姫君と影の姫君・・・双方、相容れぬはずの存在。

「・・・仲良くなれてよかった」

「え？」

突然、ロゼッタがそんなことを言うものだから、ツアリ姫は目を真ん丸くしている。

「あたしは、影だから・・・お日様に嫌われてるかと思ってた。でも。お日様は、優しくった」

お日様・・・ツアリ姫であり、本当に太陽なのかもしれない。それが本当は何を指しているのかはロゼッタ自身も分からなかった。だけど・・・お日様に嫌われている。そう、思っていた。

「あたしのこと、ちゃんと受け入れてくれた・・・」

でしょ？と、瞳がそう告げる。ツアリ姫は何度も何度もうなづいた。

「さ、行こう？パドマさんに会わなくちゃ」

ロゼッタはツアリ姫に手を差し出す。そして、手を取るのはツアリ姫。そして、ふたりは中へ入っていった。

「パドマさん、いますか」

さして大きな声で言わなかったのに、騒いでいた酒場が静まり返りロゼッタに注目が集まる。

「・・・帰ってきたのかい」

昨日と同じ席にパドマはいた。ロゼッタはパドマの傍に寄り

「昨日は突然飛び出してすみませんでした」

と、頭を下げた。

「・・・礼儀はわきまえてんだね。て、ことは答えが出たのかい？」
「はい。」

頭をあげて、背を向けたままのパドマに告げた。

「アレスは、あたしが殺します」

断言した。殺すと・・・実の父親、アレスを殺すと・・・。言い返したのは、デュークだった。

「何故だ！？お前はお前は・・・！」

なんだかもう、胸がいつぱいで言葉が出てこない様子だった。

「・・・ありがと。デュークは、以外に優しいんだから・・・」

いつもなら、「以外とは何だ」と、突っ込むところだが、今のロゼッタからはまるで遺言のようにしか聞こえなかった。

「・・・やるんだね」

「やります。・・・必ず」

もし・・・ロゼッタの人生の中で影の姫君としての自覚を持った日はいつかといえは・・・間違いなく、この日というだろう。

「ロゼッタ・・・」

「ゼウスか・・・」

全てはこの青年との出会いからだった。

「・・・平気だよ、あたしは」

そう言っても、ゼウスはなかなか「うん」とは言わなかった。その

目は泣きそうな子どものようで・・・。

「・・・あたし、あんたと会って、そしてたくさんの人にあった。でも確かに、良いことばかりじゃなかったよ？・・・だけど・・・。こつあたしはおびえて暮らさなくてもいいと思うと、そんなに悪い話じゃないし。」

だから、大丈夫。

笑った彼女はまるで・・・薔薇のようだった。

こんなにも優しいのに・・・こんなにも美しいのに

なんて残酷な運命の糸を引いてしまったんだろう・・・どうしてトゲが触れようとする手を拒むのだろう。

彼女は・・・

そして、全てを背負い込んだ

そして全てを背負い込んで（後書き）

「なんでこんな頻繁に更新してんだよ。読むの大変じゃねえか」と、思った方、思わない方。とりあえず、第一章終了です。

学生なのに勉強もせず、物語に浸りまくる私ですが、これからも頑張ります！！

（テストの点が悪くてパソコンが禁止にならないように祈って！！）では、二章で会いましょう。

よろしければ、アドバイス・感想・評価をお願いします。

夢の合間

可愛いロゼッタ

わたくしの大切な娘

なのに・・・

わたくしがロゼッタの幸せを奪った

普通の女の子としての幸せを・・・

わたくしが奪った

今すぐにでもここを出て、会いに行きたい
ですが・・・

ロゼッタ・・・

「影の姫君」と称される哀れな少女よ・・・

あなたはどんな子なのでしょう。

どんな顔なのでしょう。

母はここから見守っています。

あなたが幸せになるように

あなたが苦痛から解放されるように・・・

母はここで祈っています。

好きな人は・・・いるのでしょうか。
その人と・・・幸せになれるそうですか・・・？

和中という国

すると、突然勢いよく扉が開いた。

「今の話は全て聞いた！！この場にいるもの、全員逮捕するう！！！」

入ってきたのは、ロアリス王国の兵士だ。しかも、大人数

「ふう・・・あんたらもヒマな奴らだ。仕方ない。付き合ってやるか」

「パドマさん！？」

普通ここは逃げる場面ではないのか！？なんて、思ったが気づけば自分の手に縄が巻かれている。

ああ・・・あたし、影の姫君だからか。

なんて、ロゼッタは納得してしまった。

こうして何日もかけて首都へ連れ戻され、牢屋に入ることとなってしまった。

ここの牢屋に世話になるのは2回目だ。

「・・・ゼウス、デューク隣に居るんだろう？」

「ああ」

2人が同時に返事をした。ロゼッタの隣の牢屋にゼウスたちはいるらしい。

「どうなんだ？ゼウス。牢屋に入った気分は??」

「最悪だ」

初めて会ったとき、ロゼッタは城の中に侵入するためとはいえ、ゼウスに牢屋に入れられたことがあった。なんだか、今思い出せば、懐かしい。まだ、何年も経ってないというに。

「・・・ロゼッタ」

「ん？デューク？どうかした??」

「良かったのか、あれで」

「・・・アレスの件？」

「他に何かある」

「あはつ。ごめんごめん。・・・デュークはね、あたしの心配なんかしなくて良いんだよ？」

「何故だ？」

「あたしのことだから」

「-っ!!ロゼッタ、じつはあ・・・」

デュークが何かを言いかけたとき

「おい!!何をこちゃこちゃ言っている!!!」

警備をしていた兵士が戻ってきた。そして、ロゼッタの牢屋の鍵を開ける。

「出る。国王様がお待ちだ」

しぶしぶ牢屋を出て、兵士の後についていく。

この間来たときは暗くてよく見えなかったが、廊下だけでも煌びやかなものだった。

窓のそばにおいてある花瓶、壁に張られる肖像、そして・・・玉座へと続く紅いカーペット。

「すまぬな。さがれ」

「はっ」

兵士は一礼して玉座の間を出て行った。この部屋には、王様とパドマと、そしてロゼッタしかいない。

「ロゼッタこちらへきたまえ」

つばを飲み、一步一步かみ締めて歩いていく。

「初めまして・・・ロゼッタ」

「初めまして、王様」

「・・・ふ。」

王様は笑みを零し、ロゼッタを見つめた。むしろ、睨んでいるような気もした。

「よく似ているな、アナと」

「アナ・・・？」

「お前の母親だ」

「！！！！あたしの、お母さんの名前・・・」

聞いたことなどなかった、母親の名前など・・・

「・・・ロゼッタよ、いや、影の姫君・・・。アレスを殺すというのは本当か」

「はい」

ロゼッタは即答した。

「ふむ・・・。ならば、いいチャンスをやろう。そこで、自分の全てを知れ」

「どういことですか」

「和中という国がある。そこへ行き、真実を手にしろ。・・・それだけだ」

そういうが早いか、兵士がやって来て、ロゼッタを引きずっていく。

「え？あ？ちよ、ちよと・・・」

なにがなんだか分からないまま、ともかく引きずられる。そして、扉の近くには・・・

「レイン騎士団長、そやつの和中までの同行、および帰還までの監視を頼む」

「はっ」

そこにいたのは・・・レインだった。

和中という国（後書き）

第二章始まりました！！

さてさて・・・またもや、レイン君登場です。なんだかんだいって、結構出番多いです。がんばれ！！レイン君！！いけいけレインくん！！

人を殺すということは

レインときちんと話ができたのは、城を出て和中へ向かっている時だった。

「ロゼッタ」

「あ．．．は、はい」

なんだか、レインが怖くて思わず敬語になってしまう。なにより、自分を見つめる視線が痛くて、目も合わせないくらいだった。
「話は全部聞いた」

う．．．。この話は1番聞かれて欲しくなかったのに．．．。あの時はもしかしたら、あたしは何か違う方法で断るだろうと、思っていたんだろうか。なんだか、申し訳ない気分になってしまう。

「まさか本当にアレをするつもりとは．．．」

ため息をつくようにそういうレインはなんだか疲れているようだ。

「あ．．．の。ごめんなさい」

「いや、そなたが謝ることではない。」

「はい．．．」

逃げ出したい。その1つしかロゼッタの頭は考えなかった。

「本当に良いのか？」

「決めたことですから．．．」

「人を殺すというのがどういうことかわかっているのか」

「んー．．．」

実際、人を殺したことがないロゼッタにとって、殺すというのはいまいよく分からない。分かるとすれば、「死んだ人の親族、あるいは恋人や友人が悲しむということ」．．．よく考えてみれば、人を殺してはいけないという理由が少ない気がした。

「なんとなく．．．」

「人を殺してはいけない。簡単でそして、難しい話だ。人は魚を殺す、木も、野菜も。」

こんな言い方は少し可笑しいが。と、レインは小さく笑い、続ける。
「だが、生きていくうえに仕方がない。と、言うが……。人は虫も食べられない獣も殺す。自分が嫌いだから、邪魔だからといってそして、肝心な自分達は殺されると、ひどく怒るな。」

災害、殺人、病……

「自分達は無意味に何かを殺してゆくのかな」

「……レインも、人を殺したことがあるの……？」

「……もう。隠す理由もないか」

それは、つまり……。殺したということに値する。

「数年前……。王を暗殺しようとした男を殺した。子持ちだった」
哀愁を漂わすレインの目がひどく細められる。そしてその目線の先は、ロゼッタではなく空へと移っていた。

「男が死んで……。女はたいそう喜んでいた。男の金遣いが荒く、困っていたそうだ……。」

それを聞いて……。ますます分からなくなった。『人を殺してはならない理由』が」

そして、不意に視線をロゼッタへ戻す。

「人を殺す……。それはロゼッタ。そなたが決めることだ。」

「……はい」

レインの言いたいことが分かった気がした。

「……今日は風がひどく気持ち良いな」

レインはそう言って、すっきりとした爽やかな笑顔を見せた。

「いい風ですね」

ロゼッタは、風になびくレインの長い黒髪が綺麗だな、と思った。
あとは和成につくまで、この件に関しては2人とも触れなかった。

人を殺すということは（後書き）

今回はめちゃくちゃまじめな話でした。

良い人も悪い人もこれを読んで、人殺し・・・なんてやめてくださ
いね。

怖いです。

この答え・・・皆様、分かったでしょうか？

最終話にて、この答えを・・・私なりに出した答えを書きたいと思
いますので、もう少し、辛抱してください。

東北地方の大地震で被害を受けた方々、この物語を読んでいないか
もしれませんが

ここから、命について語りたいと思います。

「なんじゃこりゃ」と、思うかもしれません、あるいはお怒りにか
もしれません。

ですが、精一杯14歳が命について考えたいと思います。

和中（前書き）

英語のテストが13点と言う奇跡的な点数を取ってしまったため、
ただいま、更新するのが困難になっています。ご了承ください。

和中

和中についてからは、驚きの連続だった。

町並みは殺風景と言うか・・・木造の平屋が続くような感じで、こ
ういうのを和風というらしい。

「今までの国とはぜんぜんちがうな・・・」

「うん。あたしもこんな町初めて・・・」

和中は最近まで他の国の者を拒んでいたため、独自の技術が発展し
たのだらう。

「で、この国に何があるんだらう・・・」

この国に真実があると、王は言っていたな。と、思い、とりあえず
町を歩いてみる。

だが、つい最近のこととはいえ、和中の人々の他国民を見る目は冷
たかった。それもなぜか・・・

レインだけという。

「なんでだろ・・・やっぱり何かあるのか？」

「髪の色・・・じゃ、ないか」

「髪・・・？」

ロゼッタと和中の人々の髪の色はとても似ていた。だが、ロゼッタ
の血のような紅い色ではない。それを少し薄めたような色をしてい
る。

「そういえば・・・。少し話を聞いてみるか」

ロゼッタたちは近くにいた男の子に聞いてみることにした。

「あのさ、ちよつといい??？」

「う、うん!!」

男の子の目がキラキラと輝きを増す。

「あのさ・・・アナって、いう女の人を知らないか？」

「ああ、アナ様だね!! 知ってるよ。お姉ちゃん、影の姫君でしょ
??？」

「えつつ！？あ、な、何で分かったんだ？」

今まで、怪しまれることはあった。だが、証拠はないし、まさかあのアレスの血をひいているとは思えないらしく、ばれることはなかった。なのに・・・この男の子は一瞬で正体を解いたのだった。

「えへへへ。だって、和中の王様って、髪の毛が真っ赤なんだ。お姉ちゃんみたいだね。」

「な、なるほど・・・ん？」

王様・・・？つまり、王家・・・アナは和中のお姫様だった？？

「この先にお城があるよ。連れて行ってあげる！！」

「あ、ありがとう」

「いいって！！ぼく、アナ様が大好きなんだ。この国の人、みいゝんなね」

男の子が無邪気に笑った。

「そうか・・・みんなに慕われて」

・・・慕われている？？死んだ人が？まさか、真実って言うのは・・・

「アナは、生きている・・・」

隣でレインも呟いた。これが、真実なのだというのなら・・・まだ、あるかもしれない。

アナとアレスの出会いを、他国との関わりを拒絶していた和中の姫君がロアリス王国へ嫁入りしたのか・・・。

これも、アナに会えば、分かるかもしれない。ロゼッタは期待と不安を抱いてアナのいる城へ向かった。

和中（後書き）

更新を怠り、本当にすみません！！13点を取ってしまいました！
！（48満点中という、中途半端な・・・以下省略）あほで申し訳
ございません！！

と、いうことで・・・あまりかけませんでした、次回、いよいよアナの登場なるか・・・！？いつ更新できるか分かりませんが、
よろしく願います。

真実へ

「・・・タオか」

「リンカ様、影の姫君を案内してきました」

「ご苦労。下がれ」

ロゼッタたちをここまで連れてきた男の子は、タオと言っらしい。

ロゼッタは、タオにバイバイと手を振った。

「アナ様がお待ちです。案内いたします」

リンカと言う少年はなにやら、レインを警戒している様子だった。だが、特に何も言わなかったので、とりあえず、大丈夫みたいだ。

「この部屋でございます」

案内されたのはアナの寝室だった。寝台に横たわるのが、アナ・・・ロゼッタの母。

「か、さん・・・？母さんなの・・・？」

「ロゼッタ・・・？その声はロゼッタなの・・・」

ロゼッタは、寝台へ走った。そして、母の顔を目にする。

・・・美しい人。椿のような、儚げな紅い髪・・・

「ロゼッタなのね・・・ええ、その髪を見れば、すぐに分かったわ・・・大きくなつて」

「・・・。聴きたいことが、あるんだけど。」

「そうね・・・。そのお方もいらつしゃい。」

アナはレインに手招きをする。レインは寝台の近くで座り込んだ。立っていると、アナを見下げてしまう体制になるからだろう。

「聞きたいのは・・・なぜ、わたくしが生きているのか、ロゼッタを生んだのか・・・ですね」

「はい・・・」

「・・・正直に言いましょう。ロゼッタを身ごもった

のは、ロアリス王国の王と、出会う前です」

「!!!!!!??」

レインまでもが、驚きを隠せなかった。まさかの真実だった。

「人魔と、いうものを知っていますか？」

「人魔・・・もしかして、あの・・・？」

「そう。ロゼッタは見てしまったのですね・・・。なりそこねた人間を」

脳裏に浮かんだその姿・・・いつぞやの村で、見た、あの・・・。

「もともと、ロアリス王国とダゼーバス王国は死んだ人間をよみがえらす研究をしていました。そこで作りだたのが、人魔・・・ダゼーバス王国の兵器

ダゼーバス王国・・・アレスの国

「人魔を知ったロアリス王国は研究をやめるよう、いいましたが、研究をやめなかった・・・。そして、わたくしをさらい、妻に仕立て上げた。こうすることで、やめさせようともくろみましたが、逆効果・・・。ロゼッタの存在も知れ渡り、わたくしは表向きは死刑で、裏では追放されました。」

「・・・母さん」

「ごめんなさい。ロゼッタ・・・ごめんなさいね・・・」

アナがロゼッタを抱きしめて、何度も謝った。

「うん・・・もういいから。もういいんだよ・・・」

どちらが、親か分からなくなりそうな中、レインは2人を見守っていた。

真実へ（後書き）

アナさんが、子供に見えるのは私だけでしょうか・・・。
ともかく、妹がパソコン代われとるさいので、ここままで・・・。
（夜やれば、いいのに）

ささやかな殺意

「あなた、ロゼッタのことがすきなのね」

ロゼッタが部屋を去って、レインはアナと2人になっていた。つきを眺めながら、アナは微笑む。

「うーん、うん」

なんともいえず感情にレインは黙るほか、何をすれば良いのか分からなかった。

「初々しいわね。あなた」

・ ・ ・ ロゼッタより上手な気がした。

「ロゼッタは、私のような者と、添い遂げてくれたとしても……」

⌈
•
•
•
⌋

「それを決めるのは、あの子でしょう？あの子があなただを選ぶというなら、それがあの子の選ぶ道」

アナが振り返る。ロゼッタと同じまなざしで……

「あの子ならこういうわよ……ってね」

アナが言った言葉にレインは胸が張り裂けそうになった。

もし、そう思っていないと断言できれば、どんなに良かっただろう。でも・・・ロゼッタがそんな想いを持っているなら・・・。

一朝

[illegible]

「落ちて着け。ロゼッタ」

「これが落ちていていられえうか!？」

「舌がまわってないじゃないか」

「う、うるさーい！！ともかく、なんでゼウスがここにいるんだー！」

「ん？それは、脱走してきたからだ」

「ロゼッタは今すぐにでもゼウスの顔面を殴ってやりたかった。

「だからって・・・」

怒りに肩が震えた。

「仮にも女のあたしのベットに入ってくるとは何事かぁ！！！！！！！！！！」

「あ？女だったか」

「死ね、もうお前の人生終われ。今すぐに」

「ははっ。ひどい言い草だな」

そうやって、また子ども扱いしてくるゼウスが腹立たしい。

そうこうしていると、部屋の扉が開いた。

「ロゼッタ？なんだか、騒がしいが・・・。」

「あ・・・」

ゼウスの胸倉を掴んでいた手を離し、レインを見る。

「お、おはよう・・・？」

「ああ・・・おはよう。で、そこにいるのはゼウスか・・・？」

「レインか。久しぶりだな。」

「・・・ゼウス。いつからここにいるのだ」

「昨日の夜当たり・・・」

「ゼウス！！！！誤解されそうなことをいうなっつっ」

「なんだ、別にやましいことなんて何も・・・」

「やっぱり、こいつ殺すか。」

ささやかな殺意が芽生えた。

「ゼウス・・・そーだなー。久しぶりにちょっと剣の練習にでも付き合ってもらうとするかな」

「レイ・・・ン？まさか・・・」

「本気でいかせてもらう」

レインのオーラが黒い中、ゼウスはしぶしぶレインの練習に付き合

い
・
・
・
・

コテンパンにやられたとか。

ささやかな殺意（後書き）

今回はギャグ方面で。
黒いレイン君・・・

あなたは綺麗なんだから

「なるほどな。そういうことか・・・」

ゼウスがレインにコテンパンにやられた後、ロゼッタたちは王様が言っていた真実について話した。

「つまり・・・ロゼッタは、不倫の子供じゃないってことか」

「でも・・・。それがばれれば、ロアリス王国にとって、頭の痛い話だった。そういうことだろうな」

ロゼッタはあくまで客観的な意見だった。レインもそれにうなづく。「ともかく、レインはこのことを知らせに行かないや行けないんじゃないか？」

「それもそうなんだが、ロゼッタは・・・」

「心配いらん。ロゼッタは俺が見ておく」

「・・・頼めるか」

「ああ」

「・・・じゃあ、ロゼッタ。くれぐれもゼウスには気をつけるように」

「俺か」

そんなゼウスを、無視して。ロゼッタはうなづいて、立ち上がるレインを見上げた。

「気をつけてな」

レインは部屋から出て行った。なんだか、やはり寂しい。

「・・・ロゼッタ。」

「なんだ」

「じつは」

ゼウスが何か言おうとしたとたん扉が勢いよく開いた。やってきたのは、レイン。

「大変だ！ロゼッタ！！」

「レイン？そんな慌ててどうしたんだ？」

「アナさんの容態が急変したそうだ!!」

「母さん!!」

「ロゼッタ・・・」

アナは寝台に横たわり、息を切らしていた。周りには医者と見られるおじさんや、メイドたちが居た。中には涙ぐむ人まで・・・

「母さん!! 死なないで!!」

ロゼッタはアナに抱きついた。アナの体がひどく弱弱しくてロゼッタは怖くなった。

「嫌だ!! あたし、まだ母さんに話したいこと、たくさんあるのに!!」

「ロゼッタ、あなたに、あえて・・・よかった・・・」

「そんなこと、聞きたくない!!」

駄々をこねるわが子をアナは優しく震える手で髪をすいてあげた。

「この髪の色・・・私にそっくり・・・瞳の色は・・・あの人ね」

「・・・」

「顔を上げて、ロゼッタ・・・あなたは・・・綺麗・・・なんだか
ら・・・」

そして、ロゼッタが顔を上げると同時にアナの手がずるりと落ちた。

「母さん・・・?」

アナは、もう目を覚まさない。

「母さん・・・!!」

アナは、もう声を出さない。

「母さん!!!!」

今はただ、ロゼッタの泣き声だけがこだました・・・

あなたは綺麗なんだから（後書き）

ロゼッタちゃん・・・！！！！

なんだか、書いている自分が憎らしくなってきた。

アナの夢の終わり（前書き）

長らく更新できなくてすみませんでした！！
いや、風邪を少々引きまして・・・ただいま、粉薬と睨みあっています。
そのところ、よろしくおねがいします。

アナの夢の終わり

ロゼッタ・・・私の愛しい子。

離れてからは、あのこのことばかりが気になって夜も眠れないことがよくあったわ。

今思ったら・・・心配なんて要らなかったわね。

あの子は私の子だから、とっても強いもの。

その代わりに、とてももろい。

誰かが支えてくれないと、崩れてしまう・・・

小さな小さな、ちっぽけな女の子。

でも、あなたを・・・そんなあなたの背負う宿命をも愛して、歩んでくれる人がいて・・・

安心しました。

もう、思い残すことはありません。

私は・・・いえ、母さんは最後の最後で幸せを手に入れました。

生まれてきてくれてありがとう。

今からは少し、昔話をしたいと思います。

ロゼッタがお腹にできた時、母さんがまだダゼーバス王国に居た時の話。

名前をどうしようかと迷っていた時の話・・・

「この子は、女の子かしら。男の子かしら」

「せっかく君の髪を引き継ぐなら女の子がいいな。男だと綺麗過ぎて変だ」

「あらあら。まだ、髪の色なんて分かりませんよ。それに髪の色が私と同じということになったら」

「分かっているよ。和中は、一族の中で紅い髪を持ったものが王位を継ぐんだろう」

「和中のしきたりですから、あなたの国の王位を継ぐことができません」

「むー……。ならば、やはり男がいいかな」

「お名前はいかがします？」

「リンなんてどうだ？」

「もっと、強い名前がいいですわ」

「では、ドラーンー!」

「もっと、優しい名前がいいですわ」

「むー・・・ならば、男の場合は後回しだー!!女子なら・・・サヤなんてどうだ?」

「もっと、華やかなのがいいですわ」

「シフォオーネ!!」

「もっと、大人らしいものもいいですわ」

「レイヤー!!」

「女の子ですよ?」

「ならば、どうしろというのだ!!」

「そうですね・・・ローゼアスなんていかがでしょう?」

「ふむ。バラのような名前だな」

「華やかで大人で女の子な名前でしょう?」

「うむ!!ならば、女の子の場合はローゼアス・・・ロゼッタ。とでもいおうか」

「きっと、素敵な子に育ちますわ」

今から、もう何年も前の話・・・。

ああ・・・夢の終わりが来てしまいました。

母さんの夢は・・・ここで、終わりのようです。

目の前が真っ白になって・・・

もう・・・いっぱいです

アナの夢の終わり（後書き）

アナの夢の終わりでした。

ただいま、先ほどもお伝えしましたが、ピーク時で39度を超える熱と戦っております。ヒマです。皆さんも風邪にはお気を付けて！

人魔使いのミミちゃんですよー！！

「・・・ロゼッタ」

「大丈夫・・・。行ける」

アナが亡くなった翌日、ロゼッタたちはロアリス王国へ帰還することになった。

だが、ロゼッタの体調が優れず、決して順調なものではなかった。

「レイン、お前」

「なんだ？」

「・・・いや」

3人は不穏な空気に包まれていた。

「あ・・・雨だ」

「これは・・・少々厄介だな」

雨が降るも何とか歩いていく3人・・・そこに人影が1つ。

「・・・!?」

「きやははははー！！ひっさしぶりですねー！覚えてますかあ？

ミミのこと」

ロゼッタの顔が険しいものになる。

「お前はー！！」

「ハアーイー！！皆さん辛気臭い顔してらっしゃいますねー誰か死んだんですかあ？」

「黙れー！！」

「いやんー！！怖い怖いー！！姫様がそんな顔しちゃいやんいやんー！！ミミのなんともいえぬ性格にレインは首をかしげる。

「な、なんなのだ、あやつは・・・」

「ふふー！！人魔使いのミミちゃんですよー！！って、ことで早速ですがあ、いただきますね」

そう言ったとたん、ミミの手がロゼッタの手首を掴んだ。

「っー！！」

想像以上の力の強さにロゼッタは思わず顔を歪めた。

「ロゼッタ！！」

「んじゃ、バーイ」

ミミが手を上げると、どこからともなく人魔が現れた。

眼球がない目の部分、皮膚はなく筋肉がむき出しだ。更に、腐敗臭がする。

「こいつ等が人魔か！！」

「ロゼッタ！！」

「レイン！！今は、こいつ等だ！！」

「しかし！！」

「ロゼッタなら、多少のことは１人で対処できる！！今はあいつを信じる！！」

「・・・すまない」

「いいから、やるぞ！！」

ゼウスは槍を手に持ち、人魔へ向かって走り出した。

「キエーーーー！！！！！！！！！！」

奇声を上げて襲い掛かってくる人魔を次々に刺し、倒していく。

いや・・・倒すというのは殺すを綺麗に言っているだけなのかもしれない。

辺りは、血と腐敗臭で満ち、血の海だった。

「くっく・・・」

レインは人目で辺りの人魔の数を確認した。ざっと１０体。と、いったところだろう。

今まで倒した数、２人合わせて１５体。全部で２５体。

「はああ！！！！」

それぞれ、最後の人魔に止めを刺し、辺りを見渡した。

溢れかえる血と腐敗臭・・・そして人魔。

「これが・・・ダゼーバス王国の王、アレスが作り出した兵器・・・」

「思った以上にひどいな、これは・・・」

「仕方ない。レイン、ひとまず急いで国に戻るぞ」
「言われなくても」
2人は、急いで馬を走らせた。

人魔使いのミミちゃんですよー!! (後書き)

グロデスク!! 今回、暗いです。

いや、まだまだまだ死んでもらう人居るのに・・・。

ゴホン!! では、また。

12年の歳月

「あんたがアレス・・・」

ダゼーバス王国の城の玉座の間に放り込まれたロゼッタを待っていたのは、王国の主であり、父でもあるアレスの姿だった。

「いかにも。何年ぶりかな？ローゼアス」

「それはあんたのほうがよく分かっているんじゃないのか」

挑発するように話し出すアレスにロゼッタは平然をよそおった。ここで、挑発に乗ればアレスの思う壺になりそうな気がしていたのだ。

「ふふ・・・12年前か。あれからずいぶんと大きくなったものだ」
「12年も経てばでかくなるわよ」

「そう、せかすな。ローゼアス。我はお前の父だぞ」

「偉そうに。育児放棄した親の言うことか」

「・・・それはお前もだ。母を殺しておいてよくのびのびと生きていられるものだ」

心のどこかで自分は何も悪くないと言い返したい自分が居た。

生まれてきたのだから、母を殺して生まれたわけではない。生まれてから、死んだのだ。

その死んだ理由が、自分のせいかもしれないけれど。

影の姫君と呼ばれるたびに思った。自分は何故、影なのかと。

なぜ、戦争の引き金が自分なのかと。はつきり言っ、無罪に等しい気がしているのに。

「・・・あたしは、殺してない」

「だまれ！！よくもよくも・・・！！」

怒りに満ちたアレスが玉座から立ち上がり、ロゼッタの首を締め上げる。

「ぐ・・・！」

「すべての責任はお前だ！！」

アレスの目がほんの少し、泣いているように見えた。

が、今は息が苦しくてただあがくしかなかった。

そして、アレスの手が離れた時意識が遠くなっていった。

「ルア、ローゼアスを逃がすなよ。この娘にはやってもらわねばならんことがある」

「了解しました」

「それと、あの件については？」

「特に問題はありません」

「ならばよい。続けよ」

あの件・・・？

2人の会話のやり取りがあまりにも単調すぎてよく分からなかったが、自分が利用される・・・

それだけは、分かったのであった。

「ロゼッタをおとりに戦争を始める！？」

釈放されたパドマが言った一言にツアリはひどく驚いていた。

戦争が起こるといふのはともかく、ロゼッタをおとりにするのだ。

それも、実の父親が。

「ああ。現に今ロゼッタは攫われた。人魔の研究に邪魔なロアリス王国の滅亡。そして、人魔に必要な人間の確保・・・そのためだろう」

「そんな・・・！！なぜ、アレスはそこまでして人魔にこだわるのですか！？」

「愛するが故にさ」

「?!」

「愛するものに会いたいがゆえに起こした惨劇なんだよ・・・これは」

パドマは空を見上げた。まるで、何かを思い出すように。

『知っていますか？空が青いのは、人の目が遠いものほど青く見えるからという説があるんですよ』

『だから、こんなに綺麗なのかしら・・・でも、これが自然だったらとっても素敵ね。って、思う私は変でしょうか？私の見ている景色は、私の見たものそのままなのに』

「パドマさん・・・？」

「なんでもないよ。急いでゼウスたちを集めな！！緊急事態だつて伝える！！」

12年の歳月（後書き）

お姫様にも容赦ないですね、パドマさん・・・。

そして、物語は戦争に一步一步近づいています。

そろそろ、パドマの過去も書かねばなりませんかね・・・。

助けにいく

荒くれ者の町イルダガの酒場にて

「ロゼッタをおとりに戦争を始めるだなんて・・・そんなの絶対に許せん！！」

「なんとしても、ロゼッタを助けるべきじゃないか？」

ツアリにつづいてこの場に居させてもらっているレインをも、ロゼッタを助けることを優先していた。

「デューク、あんたはどう思う？」

「アレスのロゼッタをおとりにどう使うかで変わってくるだろう。

もし、人魔にして我々が手を出しにくい状態にするのか、あるいは人質としてつかうのか・・・」

その場が静まり返った。

もしかしたら、もうロゼッタは・・・なんて考える者や、助けに行つて被害が大きくなれば大変な事になるといった考えが出てきたのだ。

「なんと言おうが、影の姫君だ・・・下手に助けに行けば甚大な被害が及ぶんじゃないのか？」

「それで戦争が始まれば、元もこうもないぞ」

「影は不幸しか呼ばないのかもな・・・」

ざわめきだした酒場にパドマはイラつき始めた。

結局、人というのは誰かに罪をなすりつけ、自分は楽をしようとしている。

アレスを殺す件についても何にしても、ロゼッタには宿命と称されて課せられるものが多すぎる。

「ならば、助けに行きたい者だけが行こう」

そう言つて、その場を静めたのはゼウスだった。

凛々しい横顔はまるで、歴史やおとぎ話で出てくる、英雄を思わせるような横顔には自身が満ちていた。

「作戦があるんだ」
ゼウスとレインの視線が合う。レインはしばし驚いていたが、すぐにはにかなりで見せるのだった。

「ん・・・？」

目を覚ませば、そこは乳白色の壁が美しい部屋だった。
ベッドはふわふわとしており、ベランダから入ってくる風がカーテンを揺らし、ロゼッタの髪を揺らす。

「もうすぐ、冬だな・・・」

ほんの少し肌寒い風は秋の終わりを告げると同時に冬の始まりを告げていた。

「目をお覚ましになられたのですね」

感情のない幼げな声がして、振り返ると部屋の入り口付近に小柄な少女が立っていた。

「ロゼッタ様の世話をするように命じられたルアです。」

「あ、はい・・・」

水色の綺麗な髪とは対照的なぶどう酒のワインのような赤い色の瞳。どこか自分に似ているのに、どこか違う印象を持つルアになんとか敬語で答えてしまった。

「お食事になられますか？それとも、湯浴みをしますか？」

「・・・帰る。って、言ったら？」

警戒気味に言ってみると、ルアの目が冷たく光る。

「お帰りになられるというのならば・・・」

ロゼッタは、目を疑った。小柄な少女がなんと・・・

「このルアを殺してからにしてください」

壁にロゼッタよりも大きな穴を空けたのであった。

助けにいろいろ（後書き）

ルアちゃん、あとで壁を直しておこうね。

と、言うことですが・・・。

なんだか、この物語だんだん短くなってますよね・・・反省します。ちよっと、あまり書くと、見る気失せるかなって、思ったのであまり書かないようにはしてるんですが。書かなさすぎ？

ちなみに運動会は、運動場がぐちゃぐちゃなので、明日に延期です。

救出作戦！！

「ロゼッタはダゼーバス王国の城なんだな」

関所の付近にて、兵士を縄で縛り、ロゼッタについての情報を聞き出した。

ロゼッタを救出に来たのは、レイン・ゼウス・デューク・パドマ・ツアリの5人だった。

「ここからだ、西のほうか」

空を仰ぎ、太陽の位置を確認する。

「デューク、お前、学あったか？」

デュークはこれくらい当たり前だと言うように、ふんつと、そっぽを向いた。

この2人は相変わらずだ。ピリピリしているのは、（パドマはいつものこととして）

レインだった。

「・・・レインさん。そ、そんなにピリピリしなくても・・・」

レインの気持ちなんて露知らないツアリはそう言ってレインをなだめようとした。

だが、そんなことではレインの気は収まらなかった。

「おい・・・レイン。お前の気は分からなくもないが・・・」

「しかしだな、ゼウス。もしもロゼッタの身に何かあつては・・・」

「信じるよ。そこは、ロゼッタを」

レインは無言でゼウスを見る。

もしかしたら、もしかして・・・

いや、今はそんなことを考えている場合ではない。・・・が。

「・・・そうだな」

今は、何を考えたって仕方ないのでとにかく気持ちを落ち着かせた。
「行くよ！あんたら！！」

パドマに続いて、レインたちは歩き出した。

関所を越えれば、そこは平原が広がっていた。

そして、小さく城が見える。

「アレスの根城……か？」

「違うくわないが……」

なんだか、どうでもいい会話を隣で聴きながらツアリはロゼッタを思い返す。

今、自分がここにいるのはロゼッタのおかげだ。

光の姫君と称されるようになったのも、城下町でせわしく町の人のために働く少女に近づきたくて。

元をたどれば全て、ロゼッタのおかげだ。

「今、助けに行きますから……」

ほんの少しの勇気と、恐怖に震える足でツアリは歩き出した。

「どうしても、帰さないってことか……」

ロゼッタはさすがにこれは相手にできないと悟って、

「帰らないよ。少し寝る」

と、言つて、ベッドに横になった。

「……ここで眠るのですか」

「壁に穴が空いた部屋で寝るなんて、そうそうないよ」

半分やけくそなのだが、ルアはどうでも良かったのか、失礼しました。と、言い残し部屋を出ようとして、ドアのベルを握った時、動

きが止まる。

そして、振り返った時には、すでに遅かった。

「ロゼッタは連れて帰るぞ」

レインに抱きかかえられ、ロゼッタは部屋に空いた穴から出て行った。

「待ちなさ」

「お前の相手は、俺だ」

正面からデュークが現れ、刃が閃いた。

「・・・やっかいな相手ですね」

ルアの目が瞬時に刃を捉えた。

救出作戦！！（後書き）

いよいよロゼッタちゃん救出です！！良かった、良かった・・・
これで物語が終わったら、最高だったかもしれないね・・・。

全てを忘れて。

「レ、レイン！！降ろせ！！お、重いだろう！？」

「重かったら、走れていない」

笑顔でそう言われると、ロゼッタは返す言葉が見つからず、そのままの状態でいることになってしまった。

そして、林に入ったところでロゼッタは降ろされた。

やっと、降ろしてくれたという気持ちと、もう少しあしていたかったという気持ちがごちゃまぜになる。

「たしか、このあたりでパドマ殿と待ち合わせなのだが・・・」

きよるきよる辺りを見回していると、がさりという音がした。パドマかと思い、振り返るとそこに居たのは・・・人魔

「あ・・・！！」

突然のことに身動きができない。

「ロゼッタ！！」

レインが走る。人魔がロゼッタに襲い掛かる。ロゼッタは、思わず目をつむる。

びちゃり・・・

ロゼッタが次に目を開けると・・・

「レイン・・・？」

右腕がないレインに抱きかかえられる自分がいた。

「レイン・・・？レイン！！」

「少し・・・走るのが遅かったか・・・」

「ごめんなさい・・・あたしを・・・かばって・・・」

滴り落ちるおびただしい量の血にロゼッタは涙せずにはいられなかった。

「ロゼッタ・・・そなたは、逃げる・・・」

「いや！！レインも逃げよう？！」

われながららしくないことを言っていた。それは十分に分かってい

た。それでも、今はレインが心配でしかたなかった。また、自分のせいで傷ついた人間を作ってしまった……。そんな気持ちもあった。

「レイン……」

左の手を握り額に当てる。そんなロゼッタを見てレインはなぜか、幸せな気持ちに包まれた。

「ロゼッタ」

名前を呼ばれて顔を上げる。

「そなたの唇に触れることをお許し下さい」

レインの顔が近づいて、ロゼッタの唇にレインの唇が触れる。

こんな時なのに……。

ただ、レインの唇が慰めるように温かくて、ロゼッタは全てを忘れて……目を閉じた。

ほんの少しの幸せな時……ロゼッタとレインはただ、今を重ねた。そして……離れる。

「ここもすぐにばれる。そなたは逃げてくれ。」

「あ……」

レインは木の陰から表へ出る。

そこには獲物を求めてさまよっていた人魔が仲間を引きつれていた。その数は、ぱつと見たところ10体近く。

「生きろ！ロゼッタ！！」

そう言つて、人魔の中に飛び込んでいく。

右手だけで、しかも1人でこの数に勝てるはずがない。

死ぬつもりなのだ。レインは。

「レイン……」

ロゼッタは走り出した。

肉の裂ける音がしても、

骨が碎ける音がしても……

走り続けた。ただ、がむしゃらに。

頭の中ではレインの最後の言葉がめぐっていた。

!!
-

―生きる!ロゼッタ

全てを忘れて。（後書き）

最初は生きててもらうつもりだったのに、最終的には死んでもらうことになってしまいました。ごめんね、レイン君。君、邪魔だったんだ！！原作じゃ出てこなかったしね。レインのファンの皆様ごめんさい。

レイン、成仏してくれ。

そして、書きながら泣きそうになりつつ……。こんなヘンな作者でごめんね。

ロゼッタちゃんも、ごめんなさい。

レインの夢の終わり（前書き）

中間テストで更新できなくてすみません。

数学で二枚目が真つ白ということでもた、しばらく更新できない可能性があります。

馬鹿ですみません。

お父さんが怖いです。

レインの夢の終わり

私は・・・彼女に何を残せたのだろうか。

思えば、彼女には心配しかかけなかった気がしていた。

彼女はいつも無理をして、笑い、他人の心配ばかりをしていた。

そんな彼女を見ているうち、自分にできることはないだろうか。と、思い始めた。

結局・・・何もできなかったかもしれないが。

それでも。彼女と同じ時を刻めて・・・幸せだった。

気高く、美しく、凜とした彼女は、憧れだった。いや・・・その期間より、想いを寄せている人の方が、長かっただろう。

彼女の唇は、しっとりしていて、柔らかくて、温かった。

気恥ずかしいが、これが、感想だ。

そして、私の願いは・・・今の願いは・・・

彼女に生きてもらうことだ。

どれだけ辛くても。どれだけ絶望に打ちひがれても。

生きて欲しい・・・

彼女、改めロゼッタへ。

幸せに。

生きてください。

私は・・・あなたを、愛しています。

どうか・・・

この願いが届きますように。

レインの夢の終わり（後書き）

レインの夢の終わりでした。

このシーンでは、「愛をこめて花束を」という、歌を聴きながら、読むことをお勧めします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0002w/>

薔薇色の姫君

2011年10月18日21時54分発行